

平成21年度第3回まちづくりトーク

会 議 録

「夜回り先生からのメッセージ」

2009年（平成21年）12月22日（火）

15:00～17:00

逗子文化プラザなぎさホール

【司会（杉山）】 皆さん、こんにちは。本日はお忙しいところ、まちづくりトークにお集まりいただき、まことにありがとうございます。これからまちづくりトークを開始させていただきます。トークはおおむね2時間程度を予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

前半は「夜回り先生」こと水谷修先生をゲストにお招きし、「夜回り先生からのメッセージ」と題して御講演をいただきます。先生からのお話の後には、水谷先生、市長を交えて会場の皆様と30分程度のトークタイムを予定しておりますので、皆様の活発な御発言を期待しております。

なお、今回は皆様の意見交換会、ぜひ多くの方の御意見を賜りたいので、ぜひ積極的にお手を挙げていただければと思います。

では、ここで水谷先生の御紹介をさせていただきます。水谷先生は1956年、横浜市にお生まれになり、上智大学文学部哲学科を御卒業後、横浜市の高等学校の教諭に就任されました。その後、高等学校の教諭を務められながら、夜間の繁華街をパトロールし、少年・少女の非行や薬物依存の問題に尽力され、「夜回り先生」と呼ばれていることは皆様も御存じのとおりでございます。また、現在は横浜市をおやめになった後、花園大学客員教授に就任されております。著書にはテレビドラマ化されました「さよならが言えなくて」をはじめ、子供たちのドラッグの問題や命の大切さをテーマにした作品が多数ございます。また、2003年には第17回東京弁護士会人権賞を、2004年には第7回内藤寿七郎国際育児賞生命の尊厳賞、また第9回横浜弁護士会人権賞など多数の受賞をされています。

それでは、これから「夜回り先生」こと水谷修先生にお話をいただきます。先生、よろしくお願いいたします。

【水谷】 （拍手） 皆さん、こんにちは。実は御存じの方も多いたと思いますが、私は逗子市民です、今。うちの息子と娘が、息子は卒業しましたが、逗子小学校、お隣でお世話になってまして、市長とも本当に友人関係にありまして、喜んで今回の講演は引き受けさせていただきました。住んでいる逗子市のためですから。

さて、皆さん方の前にこうやって立つと、だいぶテレビで見るよりここが薄くて白髪の多い中年の親父に見えると思います。53、間違いなく中年の親父です。実は私の書いた「さよならが言えなくて」が9月18日、朝日放送でドラマ化されました。あのドラマは薬物問題について正面から取り組みまして、厚生労働省の援助を受けた上で、映画と同じオールロケという手法で、相当なお金をかけて、1億のお金をかけてつくりました。実はあのドラマのロケ、最終地が茨城県の

土浦でした。寺脇康文君に会ったことがないので、彼はね、水谷に縁がありますね、「相棒」では水谷豊、「さよならが言えなくて」では水谷修、土浦であいさつに行きました。身長は僕と同じ178センチ、顔は僕のほうがちょっといいような気がしました。でも、何より腹が立ったのは、髪の毛が多過ぎる。しかも、不自然に上に向いているんです。「君、その髪の毛、何とかならないか」と言ったら、幾ら先生に言われても、それだけは無理だと言われました。まあ、いずれにしても年相応に老けて、はげ上がった中年の親父です。でも、残念ながら、まず間違いなく、皆さん方とは住む世界の違う人間です。皆さん方は昼の世界の住人、朝眠いのを起こし、起こされ、御飯を食べ、会社に、あるいはパートに、家で家事、あるいは子供たちは学校に、幼稚園にかな。夕方になれば、みんなそろって一家だんらん。おいしい食事を食べ、夜はお風呂に入って、それからテレビを見て眠る。皆さん方はそういう昼の世界の住人だと思います。

私は18年間、夜の世界を生き抜いてきた人間です。今から18年前、横浜市立港高校、当時の横浜市民、口の悪い横浜市民が、横浜市立暴力団養成所と呼んだ学校に勤務しました。生徒数800名、全国最大の公立夜間高校でした。学校の中をバイクが走り回り、学校の中でシンナー、覚醒剤が売られる。関東1都6県で3,000万円の泥棒やった子もいる。正月の1月2日、3日、包丁1本持って、連続6店舗のビデオ店強盗、あげくの果ては箱根の山中で白骨死体が見つかり、学校の歯の検査の記録で親元に戻れる子もいる。横浜の山手警察から「水谷さん、悪いな、お宅の高2、銃刀法違反でとった、来てくれ。」「刃渡り何センチだ。」「いや、中国製のトカレフ、拳銃だよ。」そういう学校でした。

その学校に勤務したその日から、夜の世界の生活、夜回りが始まりました。当時は毎晩、今は主に金曜と土曜、その夜を過ごすまちを夜回りします。この間の金曜日は、名古屋のまちをずっと朝まで回っていました。土曜日は大阪を回っていました。夜回りは通常夜の11時にスタートをします。夜のまちに出て、制服を着た、あるいは中高生風の子を見ると、「おい、中学生か。高校生か。早く帰れ。10分後もう一回来る。いたらトルよ。いいか。18歳未満の少年が保護監督する成人の付き添いなしに夜の11時から朝の4時まで、夜のまちを歩くことを禁じられている。帰りなさい。どうしても帰れない、帰りたくない理由があるなら、あの向こうにファミリーレストランがある。店長に話つけてある。警察の了解もとってる。僕の名刺持って行け。これでな、何でも食える、飲める。先生な、もう2〜3時間回って何人か集めたら必ず行く。朝まで話聞いてやる。」エッチなビラ・看板があれば、ことごとくそれをはがして交番に届けます。売春、体を

売っている外国人、日本人の女の子いたら、名刺渡して「おい、お母さんの顔、思い出せ。これからおまえが産む子供のことを思え。悲しむぞ。昼の世界に戻ろう。戻れるよ。組筋ひもがついてるなら、ほどいてやる。電話しな。」薬物の売人がいたら、その前に立ちます。僕が見てる限り、彼らは売れない。にらみ合い。そういう生活を18年繰り広げてきました。

私の生きてきた夜の世界は、皆さん方の世界と違う。真っ暗な闇の世界でした。そして今、私には1万を超える直系の子供たちがいます。水谷党と自称しています。元暴力団、元風俗、元シヤブ中、元暴走族、彼らが僕のこの18年の直系の子供たちです。今、日本の各地で、横浜でも川崎でも横須賀でも東京でも福岡でも那覇でも札幌でも、僕のかわりに夜のまちを回り、エッチなビラ・看板を外し夜の世界の子供たちを僕につなごう、みずから救おうとしています。彼らには言っている。一人も死ぬな。おまえたちが一人でも死んだら、水谷も生きていくわけにいかない。僕は彼らのことを夜眠らない子供たちと呼びます。夜眠らず悪さをした、悪さをする子供たち。この子供たちが私のこの18年の夜の世界の闘いの中で、最も主軸の生徒でした。

でも、こんな僕でも実は今から19年前までは皆さん方と同じまっとうな昼の世界の住人でした。横浜市立金沢高校、多分卒業生の方もいらっしゃる。当時、横浜市立高校15校の中では名門中の名門と言われた受験校で、吹奏楽部の顧問、社会科の教員として相当明るい、幸せな、太陽の下の生活を送っていました。そんな僕が夜の世界に行くことになったのは、一人の親友とのけんかが原因です。19年前の12月でした。私のもとに東京の大森にある都立の夜間定時制で教員をやっている男が、暗い声で電話をかけてよこしました。「水谷、おれ、悩んでいる。教員やめるかもしれん。会ってくれないか。」「おい、どうした。夏に結婚して、今、公務員やめたら、おまえ、どうやって生きていくんだ。何があった。よし、今日な、8時で全部部活片して、すぐ電車で飛び乗る。夜の9時にはおまえのほら、学校近くの大森駅前の、前おまえと行った寿司屋で待ってるよ。おまえも生徒帰したらすぐ来い。きょうはおれがおごる。いいか、やけ起こすなよ。」寿司屋で待ってました。彼もほどなくあらわれました。寿司屋で一杯飲むわけですから、刺身の盛り合わせに生ビール、その刺身の盛り合わせを見た瞬間に、彼がこう言った。「おい、水谷、寿司だってネタ選ぶよな。腐った魚でうまい寿司なんかできるか。おれたち教員だってそうだろう。おまえはいいさ。横浜の、いや、日本の明日を担うような、まじめでいい生徒を相手に、それはいい授業、いい教育ができるだろう。でも、おれはな、夜間、定時制高校。何のため学校に入ってきたのか、暴力かナンパか、そんな腐った生徒を相手にいい教育はできん。」彼はそう言った

んです。彼がそう言うのも無理がないほど、当時の夜間定時制高校はめちゃくちゃに荒れていました。

誤解のないように言っておきますよ。今の夜間定時制高校は最高ですよ。今、夜間定時制高校に入る子供たちの7割、8割は小・中学校、いじめやさまざまな理由で学校に通えなかった不登校の子供たち、また神奈川県、あるいは大阪や東京の場合にはボートピープル、あるいは日本に親が連れて来た外国籍の子供たちで高等学校の勉強、日本語が不自由だけでも、したいな。向学心のある子供たち。あるいは、親が仕事を失い、あるいは収入が減って生活ができない。働きながら学ばなきゃいけない本来の意味での定時制の子供たち。夜間定時制高校は4年の月日をかけて小・中学校の勉強まで戻って、丁寧に丁寧に子供たちを育てます。多くの子が笑顔になって就職、進学、昼の世界に戻って行く。

でも当時は違いました。彼がそう言った瞬間に、僕は彼を叱った。「おい、いいかげんにしろ。いいか、腐った生徒、腐った子供なんているか。思い出せ。赤ちゃんがオギャーオギャー泣きながら生まれてきたとき、どんな赤ちゃんがオギャーオギャー泣きながら、将来親泣かしてやれ、将来人のものを取ってやれ、将来だれか傷つけてやれ、殺してやれ、体売ってやれ、薬物使ってやれ、差別で苦しんでやれ、リストカットしてやれ、死んでやれなんて生まれてくる。そんな赤ちゃん、一人もいないだろう。どんな赤ちゃんも、オギャーオギャー泣きながらも一生懸命立とう、一生懸命目をあけようとしながら、父さん、母さん、大人たち、生まれてきたよ！幸せになりたいな。幸せにしてね。真っ白な心で生まれてきたはずだ。だれがその子供たちを腐らせた。我々大人、大人がつくった社会じゃないか。その子供たちを生き返らすのが我々教育、教員の仕事なんじゃないか。」

彼は言いました。「やってもいないおまえに言われたくないね。」「わかった、おれが行く。横浜には5つ夜間定時制高校がある。おれが4月から行く。そのかわり、おまえは教員をやめろ。教育を語る資格も、やる資格もおまえにはない。」

彼は教職を去りました。僕は人事異動の希望調査が既に11月に終わっていました。校長先生を脅して、夜間定時制高校に行きました。おかげで、赴任させられた先は横浜市立暴力団養成所でした。夜間定時制の子供たち、本当は学ばってすごく楽しいのに、その喜びを知らないでうちの学校に入ってきたら。よし、おれの社会科の授業で、学ばってこんなにおもしろいんだって教えてやろう。春休み中にいっぱい教材つくって、意気揚々と教壇に立ちました。でも、立ってすぐ、

持って行ったもの全部ごみ箱の中にたたき込んだ。これはだめだ。机の上に足は乗ってる。花札やってる。化粧はしてる。しゃべってる。けんかはしてる。前向いてる数人の子はおびえている。教壇をおりて言いました。「おい、おまえたち、2～3分でいい、前向け。おまえたちはな、小・中学校、いろんな理由で、本当は勉強ってとても楽しいものなのに、それを知らないでうちの学校に入ってきたと思った。だから先生な、おれの授業で教えてやるんだ。結構力入れて、いろんなものつくってきた。でもな、おまえらそれ以上だ。大体おれの話、聞く気ねえな。」大半の子が、うざってえ、くせえ、ばか、殺すぞ、金八やるんじゃないかねえ、アホ。教室から出て行きました。これは人間関係つくらにゃ授業にもくそにもならん。それで始めたのが夜回りです。

私は弱い立場の人間、生徒と人間関係をつくる場合には、生徒の居場所に行って人間関係をつくります。暴走族の子とは暴走族の集会に乗り込みます。こんなことがありました。長沼シンジといいます。僕の今、右腕です。こいつは、わずか高校2年で横浜連合800名の第8代の頭をとった男です。こいつが、僕が港高校に勤めてすぐに「先生、このプリント800枚刷ってくれないかな」って、プリント持ってきました。暴走のスタート地点5カ所、中間通過地点2カ所、及び予想通過時刻、集合場所は必ずあの当時は三ツ沢ギャラン、三ツ沢の上の三菱の裏の広場でした。そこから今度は解散ルートを802枚刷りました。1カ月後に長沼が僕のところに来て、「先生、このごろ神奈川県警、優秀だわ。おれたちの動き、全部読まれてる。」「おれだよ、おれ、2枚余分に刷って、1枚県警。だからおれも行ってるだろう。」

暴力団、組筋系のことは組長と話をつけた上で、組の事務所で話し合い人間関係をつくります。

不登校、なくすの簡単なんですよ。不登校系の欠席、うちの学校で3名ぐらいが発生したという連絡を担当群から受けたら、教科担任を全員集めます。「悪いな、各教科、おれな、夜回りの後、午前中かけてこの3人の家、家庭訪問やってくる。いいか、プリントをつくってくれ、課題。こいつらが学校に出てこれるまで、頼む。そして、おれが課題持ってきたら、きょうの教科出席マル、担任もきょうの出席マルにしてやってくれ。校長の了解はとってる。」プリントを持って午前3時ごろ、親を起こしたくないので1軒目は合鍵を借りて子供部屋に入ります。玄関の音聞いて狸寝入りしてますよ。ゲームとかさわると温かいんです。肩口つんと突っついて、「おい、水谷来たぞ。プリント4枚もらってきた。これやるとな、おまえきょう出席になるんだけど。だめか。じゃあ先生、左手でやっておくから、絶対チクるな。チクられるとな、準公文書偽造で首になるから。」これを大体1週間から10日やると音を上げます。「先生、あしたからうち来ない

でくれる。おれ、学校行くわ。」よく同窓会で言われる、水谷ほどひどい教諭はいない。何で。不登校にもさせてくれなかった。甘いんだと言ってあります。

私は愛とか優しさや思いは、言葉で伝えるべきものだとは思ってない。これは女性の方々がたくさんいる。「愛してる」と100回メールもらうことが愛ですか。「愛してる」と100回言われることが愛ですか。違うでしょう。愛とは1組の人間がお互いを必要とし、支え合い、頼り合い、助け合い、優しさを配り合い、生き合っていく。振り返ったときに見るものが愛。愛は生きるものであって語るものじゃない。だから子供が好きなら「好き」なんて言わないで、いつも子供のそばにいればいい。それが私の生き方でした。ですから、授業に来ない、来ても邪魔する、暴れる子供たちと人間関係つくるには、彼らの居場所である夜のまちを毎晩歩くしかありませんでした。以来18年です。そして出会った夜眠らない子供たち、夜の世界で悪さをする、した子供たちが私の最も大事なこの18年の生徒でした。

ところが、今から8年前、我が国日本に全く新しいタイプの問題を抱える子供たちが多数存在することに気づきました。今から8年前、九州の福岡の女子校で講演やったんです。終わって校長室にいたら、1人の女の子が訪ねてきた。「先生、相談があります。」でも、どう見ても僕のかかわる子じゃない。髪の毛黒い、眉毛ぶつとい。スッピン、ボタン上まで、スカートひざまで。僕のかかわる子というのは、トウモロコシの腐ったような髪の毛で、あるかないかわからない眉毛でいっぱいいらっしゃいますけれども、目の回り助六。あれ、逗子「助六」って言わないんですか。逗葉高校なんか助六だらけですよ。今、都会では目の回り黒く塗るの、はやりません。黒く塗った女の子は名前呼ばない。助六1号、助六2号。おばちゃん目目の回り黒く塗ってると、助中1号、助中2号。歌舞伎の好きな人に聞いてください。助平丸出し、パンツ丸見えのミニスカートと。何でこんなまっとうな格好をした子が僕に。校長先生が2人にしてくれた。その瞬間に泣き始めました。座りなさいって、ソファに座らせて、じっと待っていたら、数分後に「先生」と言って腕をまくってきた。無数の剃刀で切った跡、リストカットでした。痛かったな。なでてました。「でも、ごめんな。先生が今まで一緒に生き合ってきたのは、夜の世界でやんちゃやる元気のいい、夜眠らない子供たち。根性焼きってたばこの火を押しつけるのや、縁故詰め、暴力団に入って指落としたやつはいくらでもいる。でも、リストカットはおまえが初めて。先生、おまえのために何ができるか、ちっともわからん。でも、やめたいのかい。」「うん。」と言うんです。わかった。先生、勉強してみる。一緒に生きてみるから。この問題に取り組み始めまし

た。そして愕然とした。私が毎晩夜のまちを回り、夜眠らない子供たちと生き合っているその同じ時間、暗い夜の部屋で明日を見失い、みずからを傷つけ、死へと向かう、夜眠れない子供たちが我が国にたくさん存在することに気づいたからです。

そしてあらゆる準備を調べた上で、今から約6年前の2月、勝負に出ました。「夜回り先生」という本を出しました。これは全世界で百数十万部の今、超ベストセラーです。多くの子供たちが読んだ。多分、昭和の歴史の中で最も中高生に読まれた本と言われています。そして、私の個人のメールアドレスと自宅の電話番号をあらゆるメディアで一斉に公開しました。以来電話は数えきれず。メールは確認ができます。52万の相談メール、かかわった子供の数は19万2,000人を超えました。死にたい、死にたい、助けて。リストカットがやめられない、助けて。痛い、痛い、血が止まらない、どうしよう。親から虐待されてる、助けて。先生、学校でいじめに遭ってる、助けて。大麻がやめられない。覚醒剤がやめられない、助けて。無限に続く相談メールに今、日曜の夜から木曜の夜までは、日本のどこにいても返事を書き続けています。多いときには僕を通り越して、100錠飲んだ、血が止まらない。これから飛び下りる。日本各地で十数台のパトカーや救急車がうちの事務所の神奈川県警の連絡でその携帯電話の登録場所へと飛び込んで行きます。一人の子も死なせない闘いのはずだった。でも、残念ながら76の尊い命を、この闘いの中で失いました。4名は殺人を犯しました。72名は心を病み、自殺、事故死、病死です。一人の子をなくすたびに自分を責めた。何度この闘いをやめようと思ったか、わかりません。それでも闘い続けてきたのは、私がつぶれそうになるたびに、こういう講演会場で、あるいは手紙で、メールで、電話で、「先生、2年前にいじめに遭っているって書いた中学生、覚えてる?」「覚えてるよ。どうした。」「今、夜間定時制高校にいる。みんな優しいよ、先生も仲間も。先生、生きててよかった。ありがとう。」彼らの、彼女らの「ありがとう」がなければ、闘えない闘いでした。

こんなことがありました。本を出して間もなくの3月の末、京都の21歳の女の子からこんなメールが来ました。「夜回り先生、水谷先生ですか。京都住、21、女です。きょうはこれから死にます。最後に先生の声聞きたいな。」すぐに電話をかけました。「もしもし、夜回り先生、水谷だよ。どうしたの。」「あ、夜回り先生って、本当にいたんだ。じゃあ、これから死ぬから。」「ちょっと待って。先生、せっかく電話したんだ。何があったか教えてくれないかい。」

「いいよ。私ね、過敏性腸炎という病気、パニック障害。幼稚園のころから緊張すると、うんちやおしっこ、おもらししていた。だからね、幼稚園、小学校、中学校、ずっといじめられてたん

だ。でもね、中2までは学校行けたんだよ。私、一人娘、父さん、母さん、うんと優しい。いい優しい先生にもいっぱい会えた。でも、中2の4月に新しく来た英語の先生が「おまえはな、前の授業も前の前の授業もトイレ行ったまま帰ってこない。きょうぐらい座っている。」一生懸命教室で我慢した。そうしたら猛烈なおもらし。その日から猛烈ないじめ。「うんこ、おしっこ、あっちへ行け、臭え、臭え。」すぐにね、学校行けなくなった。そのころからリストカット始めたんだ。切るとすっと楽になるんだよね。私の手みる？」写メールを送ってきました。洗濯板です。痛かったな。「それにね、先生、私、モグラっ子だよ。」「何だ「モグラっ子」って。」

「私、高校行ってない。6年間引きこもり。私の部屋2階だけど、窓ね、黒いビニール袋、何重にも張って、太陽当たってない。だからモグラっ子。でも、きょうは死ぬよ。」「どうして。」

「だって、父さん、母さん、私が引きこもりだから、いつも悲しそう、つらそう。大好きだった山登りや温泉も行けない。私が死んだらね、母さん、父さん、また元気になるもん。」「おまえって優しい子だな。でも違うと思うよ。そうだ、人のために何かしてごらん。人生変わるよ。」って言った瞬間に「そんなことできない。」電話切られました。その日から彼女の日課が1つ始まった。毎朝6時半、寝る前に僕に電話をくれる。

心に苦しみや悩みを抱えている人間は、暗い夜眠ることができません。夜の暗闇はあまりにも人を不安におののかせる。朝の太陽を待って眠るんです。そんな電話を、ほぼ1カ月聞き続けた4月の17日、いつもどおり6時半に電話鳴りました。僕は近くの公園を散歩していた。「もしもし、これから寝るのか。いいな、先生はきょうも完徹、完璧な徹夜。先生の分も寝ておいてくれ。」彼女が言いました。「先生、かれこれ1カ月、毎朝私の電話受けてくれてる。でも、私、全然進歩がない。嫌にならない?」「別に。そうか、1カ月たつか。じゃあ1つぐらい先生の頼み聞いてくれるかな。」「できることならいいよ。」「できるさ。ちょっとだけビニールに穴あけて外のぞいてみないか。先生はね、桜の花は苦手なんだ。桜の花、きれいすぎる。先生、病気持ち、来年の命が読めん。花見ると、あまりきれいで、また来年も見たいなと思うとつらくなる。でもね、桜の葉っぱ、新緑の緑、大好きなんだよ。花が終わった後、葉っぱが開いていく。色がどんどん濃くなる。今、先生が見ている公園の桜の葉っぱ、一番先生の好きな新緑の緑、京都はどうか。」「いいよ。」彼女、6年ぶりに穴あけた。「まぶしい」って声の後に「あ、お隣のおばあちゃん、ごみ捨ててる。年とったな」と言うんです。それはそうだ、6年会ってない。

「手伝ってやったら」と言ったら、「そんなことできない。」電話切られました。でも、この日

から日課が2つになった。僕に電話をしながら、穴からお隣のおばあちゃんのごみ捨てを応援してるんです。

その1週間後に事件が起きました。春の嵐、大雨、大風の中を、おばあちゃん無理をして傘を差してごみ捨てに行ったんです。傘が風であおられ、もつれ、転んだときに電信柱に頭をぶつけて動かなくなりました。逐一聞こえてました。「先生、どうしよう。おばあちゃん動かない、動かない、動かない。」ドカーンと音がしました。携帯電話投げ捨てた音。彼女、6年ぶりに家を飛び出したんです。ワーって叫びながら階段駆け降りて、玄関あけて、土砂降りの雨の中、パジャマ、裸足で飛び出して行った。「おばあちゃん、大丈夫？ おばあちゃん、大丈夫？」目をあけたおばあちゃんが最初に言った言葉、「ああ、お隣のだれだれちゃんだね、大きくなったね。」だったそうです。その日からまた日課がふえました。僕に電話をしながら、穴からお隣の玄関眺め、動きそうになると「じゃあね、先生、手伝い行ってくる。」走って行って、おばあちゃんのごみ捨ての手伝い、お茶飲み友達、話し相手、いつの間にか窓のビニール袋がとれました。

そんな6月の初めに、こんな電話がかかってきました。「先生、人のために何かしてごらんって言ったよね。」「うん、言ったよ。」「できるかな。」「何々、もうしてるんじゃないか。おばあちゃんのごみ捨ての手伝い、話し相手、尊いよ。」「ううん、先生、働いてみたい。中卒だけど。できるかな。」「うん、言うかなと思ってた。京都の北、大原でな、先生の大学の先輩が老人ホームやってる。そこでな、洗濯をしてくれる子、探してる。正直に言う。先生は洗濯したことない。うわさによると、ボタン1つで洗えるらしい。干すのは相当かったるいという話だ。勤めてごらん。給料出るよ。」勤め始めました。僕と先輩とたくらんで、その1週間後には、その老人施設で、高齢者施設で最も因業なおばあちゃん、車いす、左半身麻痺、しゃべれない。その自分の状態を受け入れられない。イライラするともう食べ物ひっくり返したり、イライラすると職員ひっぱたいちゃったりする。一番問題児のおばあちゃんの担当にしました。そんな6月の末、夜9時、珍しい時間に、弾けるような声で彼女から電話があった。「先生、先生、先生。」「お、いいことあったな。」と言ったら、「うん」と言う。「言ってごらん。」「きょう、私の担当のおばあちゃんがね、お昼にうちをもらした。おなかこわしていたみたいで、おしりべつとべとだったんだ、おむつの中。先輩たちは、きれいに拭いておむつかえればいよいよって言ってくれた。でも、あまりかわいそうなんでね、私一人でシャワー連れて行って、きれいにおしり洗ってあげたんだ。そうしたらおばあちゃん、その間じゅう私のことを拝みながらね、「ムニユム

ニムニムニム」って言ってくれた。きっとありがとう、ありがとう、ありがとうって言ってくれたんだ。その後、おばあちゃん車いすに乗っけて、ベッド連れて行って、よいしょっておばあちゃんベッドに上げるとき、左のそでめくられて、私の汚い傷、見えちゃった。そうしたらね、おばあちゃん、あつて声出して、うわあつて泣きながら一生懸命なでてくれた。先生、生きてよかった。先生の言ったこと、やっとわかった。人はなぜ苦しむのか。自分のことしか考えないから。自分の過去しか振り返らないから。人のために何かすると「ありがとう」という言葉や思いが返って来て、自分って必要とされてる、すごい大切な存在なんだって、生きる力になるって先生教えたかったんだよね。」「そのとおり。」「それにね、先生、もう一つわかったことあるよ。」「言ってごらん。」「先生、この間、1カ月前ひどかったじゃん。何で私は死んじゃいけないの。生きなきゃならないのって言ったら、先生、ワハハ、いずれわかる、ガチャンって、電話切っちゃった。でも、先生の言うとおりの、いずれわかった。何で死んじゃいけないのか。生きなきゃならないのか。」「言ってごらん。」「人はだれかを幸せにするために生きるんだよね。生きなきゃならないんだよね。」「そのとおり。おまえは水谷の学校は卒業、よかったな。おまえの傷はな、大分深い、固まるのに3年はかかる。3年たってちゃんと固まったら、皮膚の移植含めてきれいに治そうな。」この子は今、京都の朱雀高校定時制の4年生、10月に私が勤めている花園大学の推薦入試を受けました。見事に合格をしました。将来は保育士になる予定です。

もし僕が生きていれば、来年の4月から本当の僕の生徒になります。こういう子供たちの笑顔、「ありがとう」の言葉がなければ、闘えない闘いでした。でも、いずれにしても数多くの命を失いました。

こんな夜の世界を生きる私が、今、実は恐れていることがあります。逗子の皆さん、私にとって一番大事な皆さん方の世界、昼の世界に夜の世界がどんどん入り込んできている気がする。夜の世界のイライラ、攻撃性、悲しみ。この会場にいるすべての人に聞きます。子供たちも答えてね、小さい子もね。全員胸に手を当てて、この1年間、皆さん方の御家庭、おうちを思い出してください。どうですか、皆さん方の家庭、温かい、優しい、美しい思いやりのある言葉と、ひどい、きつい、追い詰めるような厳しい言葉、どっちが多かったですか。おまえはいい子だね、よくやってるよ、おまえはかわいいね、お手伝いありがとう。父さん、いつもありがとう。御苦労さま、いえいえ母さんこそお世話さまだね。こういう言葉と、ほら、何やってるの。のろのろしないの。こんなこともできないの、困った子ね。何、あんた、この薄い給料袋。うるせえ、おめ

えの飯なんか食えるか。正直に、我が家は温かい、優しい、美しい言葉に満ちていた。満ちていた家庭の方、はい、手挙げてください。うそ、逗子市の家庭の大半は崩壊していると。笑っていいんですか、なぜ笑うんですか。家庭というのは、おじいちゃん、おばあちゃんにとっても、父さん、母さんにとっても、何より子供たちにとって、最も心安らぐ憩いの場じゃなきゃいけない。そこにイライラが入ってきてることが、子供たちを追い込んでいるとは考えませんか。

もう一つ聞きます。子供さんのいるお父さん、お母さん、我が子の前で夫婦げんかをしたことあるお父さん、お母さん、はい、手を挙げてください。後で外に来てください。警察行きましょう。児童虐待です。当たり前でしょう。子供にとって父さん、母さんというのは、この世の中で最も信じている、最も大事な、大切な存在ですよ。それが幼いとき、目の前でけんかをする。子供はどうしたらいいんですか。子供の心にどれだけの傷がつくんですか。いいですか、不登校になったり、いじめに遭う子、すべてに共通しているのは、幼いときから自分のお父さん、お母さんのけんかを目の当たりにしているんです。どうしていいかわからない。もう心を閉ざすしかない。だから逃げて不登校にすぐなってしまう。人が信じれない。生きる力が弱くなる。だからねられて、いじめの対象になるんじゃないんですか。いいですか、逗子の皆さん、絶対にこれから夫婦げんかは子供の前でしないでください。きょうのところは見逃します。これからもう夫婦げんかは、そこのお寺か逗子の海岸でやってください。それから、鶴ヶ岡でも、僕は臨濟宗一派ですから、建長寺、円覚寺でよかったら、どこでも貸します。どうぞそこでやってください。

実は今、日本の子供たちが4つの大きな問題を私たち大人に、社会に突きつけてきています。「いじめ」、「不登校・引きこもり」、「心の病・自殺」、「非行・犯罪」私はこの4つの背景にこの家庭の、社会全体のいらいらを見ます。そうだ、今、10代の子、どのくらいいるかな。10代の子というか、子供たち手を挙げて、小さい子も手挙げて。そのくらいかな。よし、じゃあ君たちに聞く。今までの人生振り返れ。親からほめられた数、叱られた数、どっちが多い。僕は、私は、ほめられた数が多いっていう子、手挙げろ。うそ、あんな小さい子でも、おまえ悪ガキなんだな。親蹴飛ばしたりしてるわけないよな。すごくいい目して、かわいいものな。ひどいな。

ちょっと子供たちの数少ないんで、母親のふりして、偉そうにすわっているおばちゃんたちにこれから聞きます。なぜ笑うんですか。子供産んだら母親ですか。とんでもない。産んだ子を優しさと愛で育て上げ、育て上げた子に、お母さんの子でよかった。幸せ。産んでくれてありがとうって言われて初めて母親になるんでしょう。そうじゃなきゃ、あの冷たい秋田で、冷たい秋田

の川の中に落とされ、殺されたあやかちゃん、あまりにもむごい。あんなの親じゃない。我々教員だって、ぺらぺらの辞令という紙切れ1枚もらって先生になるわけじゃない。預かった児童・生徒と1日、1週間、1カ月、1年、3年、6年、ともに生き、教え、育てはぐくみ、育て上げた児童・生徒に「先生、楽しかった。いっぱい学んだ。尊敬してるよ」と言われて初めて我々も先生になるんです。まあ、いいです。逗子のお母さん方にお聞きします。昔のお母さん方も参加してください。胸に手を当てて、自分の子育て振り返ってください。子供をほめた数、叱った数、どっちが多いですか。私はほめた数が多いというお母さん、手を挙げてください。逗子市の親の大半は鬼ママになると。

もう一つ聞いていいですか。この1年間、夫からほめられた数、叱られた数、どっちが多いですか。私は夫からほめられた数が多いというお母さん、手を挙げてください。何だ、大半は悪妻じゃないですか。何だ、逗子市の女性は、いいところは何もなくて書かなきゃいけないですね。子供たち、ごめんね。わざと君たちが誤解するようなことを先生、あえてやりました。先生はね、日本のすべての大人を代表して、日本のすべての子供たちに謝らなきゃいけない。子供たち、本当にごめん。本当にごめん。今、私たちがつくってしまったこの社会、ものすごく嫌な社会をつくってしまった。イライラして攻撃的な社会。

事の発端は1990年秋、バブル経済の崩壊ですよ。若い方はバブルを覚えてないですよ。我々よかったですよ。給料がぐんぐん上がる。夢が持てた。まじめに5年働いたら、アパートからマンション住まい、15年働いたら、逗子は無理だけど三浦に庭つきで子供部屋つきの家建てれるかな。あのころの日本は、まじめに努力したら、それを企業であれ、国であれ、必ず報いてくれる。当たり前のことが当たり前だった。それがぶっ飛びました。当たり前です。バブルなんていうのは一部の金持ちが土地を転がし、土地を売る、売り買いすることで金もうけをしよう。それに悪のりした銀行がどんどんお金を貸し、日銀が、この国の土地が何回も買えるほどの万札を刷った。つくられた、うそのインフレです。あんなものはぶっ飛ぶのは当たり前。

でも問題は、91年以降、今に累々と連なり、これからもっとひどくなる不況です。この長い長い不景気、不況の中で、多くのお父さん、お母さんがリストラ、仕事を失ったり転職を余儀なくされた。少なくとも給料は上がらない。上がらないどころか下がる。聖域と言われた公務員の給料ですら下がる。多くのお母さん方が夫の収入だけでは立ちいかなくなり、幼い子を預け、家に残し、働きに出なきゃならなくなった。その中で社会全体がものすごくイライラしている。子供

たち、君たちの父さん、会社へ行ったらこうかも。「何やってるんだ、もっと仕事とってこい。だめ社員、おまえなんかやめちまえ。」あるいは「うちの会社、景気悪くてな、給料2割カット、ボーナス出せん。」イライラしたお父さんがどうするか。家帰ってきて、愛する妻や子供に猛烈な暴力、DV、ドメスティック・バイオレンス、貧しい地域でどんどんふえてきている。かけがえのない妻や子供に、何だこの飯。ほら、のろのろするな。急げ、向こうへ行け。向こうで勉強しろ、イライラをぶつける。ぶつけられたこと、あるだろう。イライラぶつけられて、もっといらしたお母さん、幼児虐待、貧しい地域でどんどんふえてきている。かけがえのない我が子に、何こんな点数とって。

あ、どうだ、それ、君は中学生か、高校生か。中学生。どうだ、試験の点数で親から文句言われたことある？あるな。いいか、これから試験の点数で親が文句言ったら、そのときの試験科目を全科目、担任の先生からコピーとってもらえ。お母さんにやらせろ。お母さんが全科目上だったら、恐れ入りました、徹夜で勉強せい。お母さんが全科目下だったら、いいか、何こんな点数とってって言われたら、はすに構えて、にやっと笑って、あんたの子だから。自分がテレビ見たり酒飲んだりカラオケ行ったり横になったりして子供に勉強しろ。ふざけるなです。子供に勉強させたかったら、なぜ親が勉強しない。生き方は絶対言葉で教えてはいけない。見せるんです。お年寄りに優しい子にしたかったら、日々親みずからが地域でお年寄りに優しくするんでしょう。正義を生きる子にしたかったら、日々親みずからが正義を生きるんでしょう。横横を百何十キロでぶっ飛ばして、パパ速いだろう。正しく生きなさい。「ふざけるな」じゃないですか。

まあ、いいでしょう。イライラしたお母さん、かけがえのない我が子に、何やってるの、こんなこともできないの、本当に困った子ね。あんたなんか産まなきゃよかったまで言う。じゃあ子供たちはどうしたらいいんですか。お父さん方、あなた方はずるい。いくら会社で嫌なことがあったって、女房、子供に当たり散らして、夜のちまたでうまいつまみで、うまい酒飲んでりゃいい。お母さん方、あなた方だつてずるい。いくら夫からがみがみ言われ、イライラしたって、子供に当たり散らし、夫には500円でワンコインの弁当食わせて、自分たちは主婦仲間でうまいランチでしょう。いくらでもガスの抜きようがある。でも、子供には昼の学校、夜の家庭しかない。残念ながら今、日本の子供たちの7割から8割は家庭でも学校でも叱られ続けている。ちゃんと評価されてない。追い込まれてます。

人は認められない、叱られ続けるとどうなるか。お父さん方、やってあげましょうか。毎日会

社で何やってるんだ、こんなこともできないのか、のろい、困ったやつだ。毎日言われ続けたら、何カ月もちますか。我が国日本の中高生は、それを何年耐えているんですか。ぶちキレてふてくされ、もうどうなってもいい。上司ぶん殴って、夜の世界で悪やりますか。だから子供たちは、おれなんかどうなってもいいんだ。明日を捨て、夜の世界で悪の世界に生き始める。あるいは、イライラがたまるから、お父さん方、自分の愛する女房や子供、部下に、何だおまえの仕事は、こんな飯食えるか、向こうへ行け、いらいらをぶつけますか。これがいじめの構造じゃないですか。いじめてる子だっていじめられてる。いじめを絶対に子供だけの問題で見えてはいけません。いじめてる子だって、親、先生、周りからいじめられてるんです。いじめは我々大人の社会の問題。それが子供の中に何倍にもなって増幅されてあるんです。あるいは、お父さん、毎日言われ続けたら、おれはだめな社員だって、会社に通えなくなる。今、大人もいっぱいいっぱいになっている。これが不登校、引きこもりでしょう。あるいは、心を病んで、うつ病。今だって大人、いっぱいになってるじゃないですか。リストラットをして、死へと向かう。これが今の日本の子供たちの現状なんじゃないんですか。バブル経済以降の経済の閉塞性、社会の混乱がすべて子供たちのもとに、一番弱い子供たちのもとに集められているんじゃないんですか。

逆にお母さん方、毎日夫からこう言われたら、どうですか。おまえは優しいな。おまえはすてきな。本当におまえと結婚してよかった。おまえのいない人生なんて、星のない夜空だけ。ここまで言われたら、ありとあらゆるつまみに、ありとあらゆるお酒に、ほっぺチュまでつくでしょう。人というのは認められる、評価されることの中で、明日を生きる力、自信、自己肯定感をもっていくんじゃないんですか。我が国日本はすぐれた国だ。かつて先人は何と言いました。子供は十ほめて一叱れと言った。十ほめる中で心の通い合いをつくり、人間関係をきちっとつくって自信を持たせ、自己肯定感を持たせ、その上で1カ所を丁寧に丁寧に変えていけと言った。そのゆとりを我々大人は、教員は、親は、なくしていませんか。これが子供たちを追い込んでいるんじゃないんでしょうか。

そうだ、決めた。逗子の鬼ママさんたち、きょうは帰りにケーキ買って行ってやってください。そのかわり、ケーキ買うときは、必ずメイド・イン・逗子ですよ。今、国や本当に県なんかは面倒見てくれない。このまちを自分たちで支えるんです。そして、そのケーキの上に、まんじゅうでもいいです。「ごめんね」とチューブで書いて子供さんに食べさす。チューブといっても、わさびとからしはだめです。そして、今夜子供たちが寝たら、臨時の大人だけの家族会議、お願い

です。明日から皆さん方の御家庭の子供たち、お孫さんやお子さんが1日30個は何かを認めてもらえる。評価してもらえる。ほめてもらえる。優しい言葉をもらえる家庭づくりやってくれませんか。おまえは宝物、おまえは優しいね、お手伝いありがとう、お願いします。

あと、きょうはおじいちゃん、おばあちゃんをやっていらっしゃる方もちらほらお見えになっている。おじいちゃん、おばあちゃんね、遠くにお孫さんのいるおじいちゃん、おばあちゃんにお願いがあります。遠くのお孫さんに定期的にお電話をしてくれませんか。生まれてすぐから小学校3年生までは毎日、何、水谷先生、そんな生まれてすぐの赤ちゃんに電話したってわからないでしょう。いいんです。息子さんか娘さんにね、赤ちゃんの耳に優しく受話器を当ててもらおう。そしておばあちゃん、こう言うんです。「バブバブ、逗子のおばあちゃんだよ。おばあちゃんはね、おまえが大好きなんだよ。いい子になあれ、優しい子になあれ。」たとえ電話を通してでも、おじいちゃん、おばあちゃんの優しい声を毎日聞き続ける。それがその子の心に一生に通ずる優しさや生きる力をつくってくれる。

お孫さんが小学校高学年から中・高生になってからは、ぜひ週に1回、金曜日、日曜日の夜の9時から10時に電話をしてくれませんか。実は金曜、日曜というのは、我々子供の命を救う活動をしている者にとっては魔の日です。皆さん、気づいていませんか。我が国日本で最も児童・生徒が自殺している曜日です。当たり前ですよ、金曜日。月、火、水、木、金。学校の中でのいじめや待機をし、仲間との関係の悪化、それが5日分、積もり積もって、夜苦しくて眠れない。翌日は朝起きなくていい。我が家の相談メールがゼロが1個違います。日曜日は、その地獄の始まる前の晩です。電話してやってください。「もしもし、逗子のおじいちゃんだぞ。おじいちゃんな、おまえのことがかわいくて、かわいくて、だから心配でな。どうだ、学校は楽しいか。友達はできたか。まさかいじめに遭ってないだろうな。いじめに遭っていたらな、じいちゃんな、うちの代々鎌倉時代からつながっている槍持って殴り込みかけに行くからな。そういえばじっちゃん、ばっちゃんな、1月からな、積み立て貯金してるんだぞ。年金を。何でか、わかるか。おまえのクリスマスプレゼント、お年玉、楽しみにしておけ。」お孫さんがふてくされ、夜の世界に行こうとしていたり、心を病んで死へと向かおうとしているときに、この1本の電話が尊い尊い命の糸になるんです。我が国日本の子供たちが、かくも病み、苦しんでいく背景には、核家族化がものすごく大きな原因の一つとして挙げられています。子供さんが小さいとき、おじいちゃん、おばあちゃんがいてくれたら、お母さん、すごく楽になる。そのできたゆとりを、いっぱい抱き

しめたり、いっぱい添い寝したり、優しさにして子供に返せる。お孫さんが中高生になってからは、父さんから叱られ、母さんから叱られ、逃げ場がなくなったとき、じっちゃん助けて、ぼっちゃん助けて、最後の逃げ場があった。それを失ったことが大きいと言われてます。でも、今の御時世に、すべての日本の子供たちがおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住むのは無理だから電話、電波という文明の利器の力を借りて、命を救う糸にするんです。お母さん方に言うておきたいことがある。お母さん方、あなた方はどこまでいっても子育ては素人です。1人目で1回目、2人目で2回目、せいぜい3人目で3回目、我々教員は何人の子供を育てますか。ですから抱え込まないんです。おじいちゃん、おばあちゃんや先生方、できるだけ多くの人たちの力を借りる。そして子供さんを小さいころから、できるだけ良質な大人にたくさん会わすんです。子供というのは、いい大人と会った回数が多いほど、人を見切れるようになる。人にだまされなくなるんです。小さいころからいい出会い、いい大人との出会いをたくさんつくってやってください。それが子供たちを明日助けていくんです。

きょうは逗子の教育長もおみえになっています。お願いがあります。逗子市のすべての小・中学校では、あした臨時の職員会議をやってください。そして、年内はいいです。1月から逗子のすべての児童・生徒が学校で1日10個はだれかしらの先生から何かを認めてもらえる。ほめてもらえる。評価してもらえる学校づくり、やってくれませんか。よくこの問題解けたな。おまえの掃除は宇宙一、おまえは優しい子だね。これだけはほめたくないけど、君たちの髪の毛の量、多いな。いいなあ、うらやましい。少し分けてほしいな。子供たちの周りを日々、家庭で、学校で、温かい、優しい言葉がくるみ込んでいたら、どの子がいじめをやりますか。どの子が心を閉ざし、不登校、引きこもりになりますか。どの子が心を病んで死へと沈んでいきますか。どの子がふてくされ、夜の世界で乱暴をやりますか。子供というのは、受けた優しさや愛が、語られた夢や希望が多ければ多いほど、非行、犯罪、心の病から遠ざかる。受けた優しさや愛が深ければ深いほど、非行、犯罪、心の病に入っても、その傷は浅いんです。子供たちは優しさを待っています。

実は、僕は夜間定時制高校で12年間生徒指導部長をやりました。学校のナンバー4です。力があります。必ず4月の第2週にやったことがあります。教科担任を集めて頼むんです。「悪い、各教科、5月のさ、第2週の新入生、1年生の定期試験、中間試験、平均80点とらせろ。」「水谷さん、無理だよ。カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムから来たボートピープルの人のお孫さんやお子さん、やっとな平仮名が読めて書けるかだぞ。」小・中学校学校行ってなくて、因

数分解どころか九九のできない子、英単語どころかアルファベット書けない子にどうやってとらすんだ。きょうから我々生徒指導13名が新1年生、夜の9時から10時まで1時間、試験まで残す。部活は参加させん。できるだけ早く試験問題つくって、それを渡してくれ。問題は渡さん。答えは暗記させる。やるんですね。70点ぐらいとる。すごいですよ。1年生で少年院から手錠・腰縄で校長室受験、警察官と警務官が来て、4月、5月、6月、7月ぐらいまでに出所できる場合には、学校の単位が足りませんから授業日数が、試験受けれるんですね。いつもなら、こんな目で「おい、水谷、いるかよ。」って職員室に入ってくるのが、目垂れ下がって、「水谷先生。」とか入り口で言うんです。「おい、嵐になるぞ。」って。「先生、言うなよ。」「見てみろよ、80点。おれ、人生初めての2ケタ体験。おれもやるもんだな。」目がきらきら輝いてる。小・中学校いじめで学校に通えなかった子、職員室入れないんです。僕の周り、いつも休み時間、子供たちいっぱいいる。僕がトイレ行こうと思って外へ行くと「先生、先生。」って呼ぶんですね。僕は地声が大きいから、「おう、だれだれ、どうした。」って。「しーっ。」、そばへ行くと丁寧に畳んでた試験広げて、先生、90点、90点、目からぽろぽろ涙流しながら、でも目がきらきら輝いてる。夜間定時制ですから、実は親から捨てられたり、虐待を受けて、平和学園が多かったんですけれども、茅ヶ崎や、あるいは横浜の泉区の泉学園、そういう施設から通ってくる子供たちが、その次の日、数人で来るんです。「先生、おれらゆうべ泣いちゃった。涙っていいものだな。心を洗うぜ。」とか言うから、「きざなやつ、何があったんだよ。」「ほら、おれたちさ、70、80、90とったじゃん、試験で。きのう施設帰って神父様にお見せしたんだ。そうしたら神父様、シスター、5点も10点もとれなかったおまえたちがこんな点とれるなんて、神様の思召し召しだって、わあわあ泣きながらミサやってくれて、おれたちも泣いちゃった。」目が輝いている。夜間定時制の子供たちは、本当に教育の現場でも家庭でも恵まれない。いつもつまはじきにされ、攻撃され、虐げられた子供たちです。その子供たちが、たかが1回の試験で70、80とることの中で、本当に変わっていく。このゆとりこそが本当の意味での我が国日本の子育てであり、教育だったんじゃないんですか。それをバブル経済以降のこのいらいらした経済状況、社会状況の中で、親や先生方が忘れてしまった。それが今、子供たちから生きる力を奪い、追い込んでいるんじゃないんですか。子供たちは優しさを待っています。

さて、こうやって家庭でも学校でも叱られ続けた子供たち、ある身体症状が起きるんです。夜眠れなくなるんです。簡単ですよ。心や頭はぼろぼろに疲れてるのに、肉体は疲れてないから。

この心身の分離をストレスといいます。実はリストカットやうつ病は、いいですか、先進国でしか起きてません。アメリカ、イギリス、フランス、日本、ドイツ。当たり前です。アフリカや南アジアや南アメリカの大人も子供も、生きていくためには朝早くから夜遅くまでダイヤモンドの鉱山、金の鉱山、あるいはバナナやコーヒー豆のプランテーションで、ぼろぼろになって働く。夜なんて疲れて眠るしかない。だからリストカットやうつ病のことをぜいたく病と言うんです。ですから、簡単な治療法があります。うちの子が学校行かない。行こうとすると泣く。やめようと言う。あるいはおなか痛くなる。あるいは夜遊びを始めそう、髪の毛染めた。そんなときは、いいですか、家族みんなで逗子の海岸から由比ヶ浜まで1往復走るんですよ。夜。家へそれで帰ってきたら、夜遊びしようかな。だめだ、眠い。リストカットしようかな。だめだ、眠い。いじめで苦しもうかな。だめだ、眠い。きちっと肉体を疲れさせてやる。

今のこの文明社会というのは、実は肉体は疲れなくなっている。その反面で、心と頭はぼろぼろに疲れる。この逗子ですら、道一つ歩く。信号一つ渡るのに、常に耳をそばだて、人の動きを見ながら、車の動きを見ながら、注意しなきゃならない。いつも神経がすり減る。それに見合うだけ肉体をすり減らしてやる。例えば逗子からですよ、いいですか、10年後にいじめ、不登校、引きこもり、心の病、自殺、非行、犯罪、ほとんど子供たちの問題をなくす簡単な方法があります。一銭のお金もいらない。逗子のすべての小学校は、授業が終わった後、小学校1年生は校庭を3周担任の先生と回ってから帰る。小学校6年生は校庭10周回ってから帰る。君は中学校何年生、指でやって。中学校3年生は校庭3,000周回してから帰る。うそだよ。きちっと肉体を疲れさせてやる。健全な肉体にしか健全な精神は宿らない。これやったらすごいですよ。50年後、逗子の財政がどれだけ楽になるか。お年寄りがみんな健康じゃないですか。こういうのを一石二鳥というんです。市長もいるから、きっとやってくださるでしょう。まあ、いいです。

こうやって、夜眠れなくなった子供たち、心を病んだ子供たち、病み始めた子供たちが一番最初に救いを求めるのは、これが困ったものなんです。見えない相手です。メール、携帯電話、インターネット。子供たち、いいか、何人かしかいないけども、メール、携帯電話、インターネットは、情報を調べたり伝えたりすることができる優秀な道具です。でも、あんなもので愛や友情、心を思いを伝えることはできないよ。独身の女の子たちに言うておく。今つき合っている、これからつき合う男が、メール、携帯電話、インターネットで愛してるだの好きだの言うてきたら、その男は愛の何たるかを知らない、口の軽いうそつきだ。別れなさい。もしもハートマークなん

か男のくせに書いてきたら、こいつはアホだ、捨てなさい。そんなものですよ。愛してるや好きというのは、神聖な言葉です。神聖な場所で言うべきだ。僕の場合にはお墓が多かった。僕はほら、横浜だったですからね、外人墓地です。ゲゲゲの鬼太郎ではありません。お墓とか教会とかお寺とか神社とか、そういう神聖な場所で、気をつけをして、50センチの距離で、相手の目を見ながら、「僕は君が好きです。つき合ってください。」こうやって言ったってな、先生な、53年の人生で29人にふられたぞ。それでも伝わらないものが、そんなメール、携帯電話、インターネットで伝わるか。これはお母さん方、単身赴任、出張に行った夫が夜の7時、8時ごろ、出張先から「愛してるよ、好きだよ、お土産買って帰るからね。」って甘い言葉言ってきたら、必ずその夜、悪いことやろうとしてる。朝まで5分置きに電話攻勢、そんなものでしょう。

また、道具というのは怖いんです。逗子市民の皆さん、使い方を間違えると使っている人間を奴隷にして滅ぼす。皆さんに聞きたい。3歳の子供に無造作に包丁を持たす親いますか。いないでしょう。自分を傷つけたり、人を傷つける。包丁一本、子供たちが自立して持つまでに、どれだけ長い年月、親、先生が丁寧に丁寧に教えますか。そばに立って。また子供さん小さいときは、手の届かない高い場所とかかぎのかかる場所にちゃんと保管したでしょう。でも包丁より危険な携帯電話、メール、インターネット、ゲーム機を今、日本の親たちは何の指導も管理もしないまま、無造作に持たせる。いいですか。携帯電話、メール、インターネット、ゲーム機がなかったら、日本の不登校、引きこもりの8割、9割は解決してます。退屈で家にいけない。深刻ないじめや、心の病や非行・犯罪の大半はないですよ。それ以上に偏差値が上がる。子供たちは優秀に成績が上がりますよ。

実は僕は6月、参議院の文教委員会に呼ばれました。どうしても文科省のお偉いさんをお呼びしておいてくれ。話したいことがある。呼んでもらいました。僕は文科省のお偉いさんに言いました。あんた方は一体何を考えてる。ゆとり教育、そんな中で総合的な学習の時間、わけのわからない教科を学校に振りあててきた、小・中・高校に。普通は、新しい教科をつくったら、人と金を出す。あんた方は人も出さん、金も出さん。でも、現場の教員たちが、小・中・高の先生方が子供の時間を奪う以上は、本当に実りあるものにしたい。地域交流、高齢者との交流、奉仕体験あるいは就労体験、そういう中で各地から、やってみたらいいものだな。こういう成果が上がった。いろんな成果が上がってきているときに、世界の中での偏差値が下がったから、これからは詰め込み教育、ゆとり教育はやめる。土曜授業まで。違っただろう。ゆとり教育が失敗したんじゃない

て、つくったゆとりが携帯電話、メール、インターネット、ゲーム機に奪われたんじゃないか。あなた方は部下である教諭をなぜ守らん。企業を守るのか。言ったことがあります。携帯電話、メール、インターネット、ゲーム機がなければ、日本の子供たちの偏差値はすぐに上がります。何であんな道具に私たちの明日の宝物、夢である子供たちをつぶされなきゃいけないんですか。逗子の皆さん、お願いします。携帯電話、メール、インターネット、ゲーム機を10代の子に持たせていい。でも、必ず夜の11時から朝の6時までは成人式を迎えるまでは親が管理してくれませんか。

納得できるように理由を説明します。私たち人間というのは、動物です。今から500万年前にチンパンジーから分離した。わずか500万年の歴史しかないサル的一种です。私たち人間という動物は、夜行性の動物ではありません。昼の太陽の下で働き、愛し合い、語り合い、生きるようにつくられた昼行性の動物です。夜行性の動物、例えばキツネにとって、夜は楽しい。月明かりの下で踊りを踊ります。当たり前です。寝てる小動物を食べる餌の時間だから。ところが、昼生きるべくつくられた人間にとって、夜は本来眠るもの。だから怖い。不安定で、不安で、感情的になる。その不安定で、不安で、感情的な夜の時間に子供たちがゲームやインターネットをやるから、仮想現実の世界から戻れなくなる。メールあるいはインターネット、あるいは携帯電話、コミュニケーションをとるから、しなくていいけんかをしたり、人を傷つけたり傷つけられたりするんじゃないんですか。これはお母さん方、お父さん方、思い出して、若いころ夜書いたラブレター、朝になったら読めましたか。読めないでしょう、何でこんな派手なことを書いたんだ。これなんですよ。ここだけを持てば大丈夫なんです。

そうだ、そのかわり逗子市民にプレゼントしようかな。逗子初登場、日本で1機種しかない携帯電話。優秀ですよ。何ていったって通話料無料、愛や友情、心や思いをほとんど間違いなく伝えることができます。欲しい方にだけあげます。10代の子は全員プレゼントするから手挙げて。通話料無料、愛や友情、心や思いを伝えることができる携帯電話、欲しい方、手を挙げてください。手挙げない人にはあげませんよ。はい、子供たちは絶対手挙げて。はい。じゃあ手挙げた人は後で入り口で水を入れたバケツを置いておきますから、今持つてる携帯電話を電源入れたまま捨ててください。顔覚えてますからね、その場で逃げようとしたら、頭坊主にしますよ。僕は髪の毛には恨みがある。僕のあげる携帯電話、すぐつくれます。必要なのは紙コップが4つ、糸と針と和紙とセロハンテープ、糸電話ですよ。逗子市民が、特に子供たちが、みんな糸電話を持っ

たら、本当にこのまちが子供たちがどれだけ優秀で優しくなるか。いいですか。使いこなすこともできない道具は人を奴隷にする。ましてや子供たちは奴隷になる。絶対子供たちを道具の奴隷になんかにしてはいけない。それを親が、ちゃんと教えていかなければならないんです。それだけは覚えておいてください。

君たちは携帯電話持ってるか。じゃあおれの目の前で水を入れたバケツに入れてもらおうかな。嫌なんて…じゃあ、きょうからちゃんと11時から親に預けますか。はい、約束ね。じゃあ、それなら許してあげましょう。

さて、こうやって見えない相手に救いを求め、入れません。さらに苦しんだ子供たち、ある暗い夜、剃刀、カッターナイフを手にします。リストカットが始まる。お父さんに叱られたの、私が悪いから。今、リストカッターは100万人を超えました。10代、20代の世代人口の7%以上、しかも猛烈な勢いで今、ふえています。リストカットは伝染します。周りでとめている子が切ってくるんです。はい、逗子の方々にお聞きします。リストカットという言葉をお聞きした方、お手をお挙げください。はい、手をおろしてください。身の回りに知り合いでリストカットしている人、子供を知っていらっしゃる方、はい、手を挙げてください。異常に多いんです。逗子や葉山は。いいですか。リストカットというのは都会ほど少ない。いいかげんなまちほど少ないんです。いいかげんなまちは子供たちが夜遊べるし、都会ならば夜の暗闇の中でどこでも過ごせる。リストカットはちゃんとしたまちほど多いんです。非常に困った問題です。今、リストカットをしている子供のいない中学、高校は日本で探すのはまず無理です。でも、しかも学校レベルからクラス普通レベルへと猛烈な勢いでふえてきています。大変な問題なんです。

でも、この問題を解決するには、原点に戻るしかない。その子供たちをどう優しく生きる力をもう一度つくってもらわなければならないんです。でも、多くの大人たちはリストカットしてる子を見ると先生もとめます。やめなさい、そんなこと。リストカットは絶対とめてはいけない。素人がとめてはいけないんです。リストカットは生きるためです。ぱんぱんになった心を切る痛みや、流れ出る血の中で自分を罰し、自分の存在を再確認してる確認作業なんです。問題なのは切ってる事実じゃない。なぜ切らざるを得ないところまで追い込まれたのか。その原因。原因を取り除かずにリストカットだけを封印すると、その子の心は爆発するかしぼむか、狂うか死ぬかしかなくなるんです。

リストカットの原因なんて、たったの4つしかないんですよ。1、親の虐待。2、親の過剰期

待。優秀な高校で今、非常にふえてきてます。3番、学校におけるいじめや対教師、仲間との関係の悪化等の学校での諸問題。4番目、18過ぎて切ってるケースは4番目。過去におけるいじめやレイプや猛烈な暴力の後遺症、PTSDといいます。このどれかなんです。これを専門家の力を借りてほどこ必要があります。もう一つ方法があるんです。宗教の力を借りるんです。実は不登校の子供が月曜から金曜まで、午前中だけでもお寺や教会、あるいは神社、宗教施設に置いていただくと、学校に戻れる日が短くなります。リストカットの子供はお寺や神社、宗教施設の周辺では切れません。これはね、誤解しないでくださいよ。神や仏を信じろと言ってるんじゃないんです。私たち日本人の文化的なアイデンティティーを信じろ。私たち日本人は人さまが先祖代々尊敬し、尊んできたものをおそれる、畏怖する心を持っています。皆さん信じようが信じまいが、逗子のあの市役所の隣の神社、あるいはこっち側の向かいのお寺の中でつば吐けるでしょうか。立ちションされて困るところに鳥居のマークや卍のマークや十字架のマークを書くと、だれも立ちションしなくなる。これは日本人の心なんです。それ使う手があります。私は8年前から良寛さんのいる寺づくりプラン、日本の各宗教界に宗教施設を病んだ子のために開けてくれという運動をやってきました。ついに去年から開き始めてます。旧仏教界では、浄土真宗西・東、浄土、臨済、曹洞、物流、真言、日蓮、8宗派が既に900カ寺以上を日本各地で若手僧侶が中心に開けています。不登校の子や心を病んだ子が昼、そこで置いていただいています。新宗連傘下では、立正佼成会及び金光教壇とPL教壇が関西を軸に開け始めました。天理教壇は1万数千の施設、表統領が全施設を開ける準備に入るように指示を飛ばしました。創価学会は神奈川県内で2施設、文化センターを今、実験的に開けて様子を見ています。キリスト教壇はプロテスタント、カトリックともに常に教会の扉は開いております。神道青年会は今、名古屋を中心、愛知県を中心にして神社の一部を開け始めました。こういう方法もあるということは覚えておいてください。

実はおもしろいんです。僕は今、京都の花園大学で教鞭をとっています。花園は建長寺、円覚寺と同じ妙心寺派臨済宗。禅宗のお寺がつくった大学です。50名の雲水、学問僧を教えています。彼らと今、月1回、実は京都のまちを夜11時に京都市役所をスタートして、朝の5時まで、雨の日も雪の日も晴れた日も、ずっと50人を引き連れて歩いています。僕は夜回り先生ですから、別に何も言わないんですが、彼らは衣で托鉢ですね。手を合わせながら、「法雨」と言って回ります。臨済宗は南無阿弥陀仏も南無妙法蓮華経でもなくて、「法雨」といいます。法律の法というのは、だるま、仏様の教えが雨のように人々に注ぐように。すごいですよ、寺町の映画館のあた

り、夜11時半から12時、たむろしている10代の子が、我々が通るところやってお祈りして頭下げて帰る。もっとすごいですよ。白川祇園とか川端のあたり行くと、エッチなお店に入ろうとしてたお父さんが、恥ずかしそうに帰るんです。あれで味をしめまして、このごろ、ソーランド街や、いわゆるエッチなお店のあるところを僕は夜回り。大体観音経か般若心経を唱えて歩いています。「観自在菩薩」「般若波羅密」、すごいですね、エッチな店に入ろうとした人が帰る。そうだ、逗子でもやりませんか。逗子市民は夕方暗くなったら、逗子のまちを歩くときは、キリスト教の方は賛美歌でいきましょう、コーラン、イスラムの方は何かコーランの一節でいいです。あとは自分の信じる、神道教の方は祝詞「八百よろずの」でいいです。宗教の言葉で逗子を満たしたら、あらゆる悪や薬物が入ってこないんじゃないんですか。こういう方法もあるというのは覚えておいてください。皆さん、ティッシュ配りで困ることあるでしょう、客引きで。簡単ですからね。西口あたりで、横浜駅でティッシュ配られそうになったら、南無阿弥陀仏。すぐ逃げて帰ります。南無妙法蓮華経。こういう文化的なことを利用することも一つの方策だというのは覚えておいてください。

さて、最後に。今、日本の子供たちのもとに最も近づいてきている最大の悪の魔の手、それは薬物、ドラッグです。残念ながら今、10代の子供たちの5割、2人に1人は今まで、そしてこれからの人生で身近に薬物について見聞きするというわけがございます。25%、4人に1人は誘われます。2.6%、39人に1人は使うと言われています。実は恐ろしい数値があります。2002年に神奈川県教育委員会がもの見事に厚生労働省にだまされまして、仕組んだのは僕です。神奈川県内の10の高等学校で、偏差値別です。男子50名、女子50名、1校100名、10で1,000名、薬物乱用の実態調査を行いました。いいですか、大麻の使用8.2%と答えた高校は神奈川県立高校随一の受験校です。シンナーは底辺の学校で、あの当方で2.9%程度でした。覚醒剤は全体を平均して女子が3.7、男子が2.9%でした。これが今の神奈川県内の、もっとこれをひどくした状況です。今、大学生の薬物乱用が続いています。早稲田大学、法政大学、この間は関西大、大阪経済大、近畿大。日本中の大学を回って講演してます。例えば法政大でこれをしたとき、君たちの周りに薬物を乱用している友人がいるのは、2割が答えています。じゃあ、薬物について身近でうわさが聞いたことある大学生、6割があると答えています。もう子供たちのもとに、身近に薬物が入ってきています。まして湘南はサーフィン。サーフィンの文化です。サーファー文化、あるいはスノボ、スノーボードの文化等、大麻がものすごく深くかかわってきています。その意味で

大きい事件をこの地域でもたくさんやってきている。もう薬物は外の問題ではない。もう我々の子供たちのうちに入り込んだ問題だという危機感を持ってください。

私はこの薬物問題、一人の少年の死で向き合いました。18年前、マサフミという少年と知り合った。もうシンナーどぶ漬け、毎日シンナー吸って、よれよれの子でした。かわいそうな子だった。小5のとき、母一人子一人なんですけど、貧しさの中でのすごいじめに遭った。いじめられているマサフミを助けてくれたのが、周辺の暴走族のお兄ちゃんたち。小6から暴走族に入っ、小6、中1、中2、中3。4年間シンナーを吸いっぱなしだった子です。そして僕につかまった。つかまえた翌日、僕のところに来ました。「先生、おれ意志が弱え。一人じゃシンナーやめられねえ。先生と一緒に暮らしたらやめれるかも。」「いいよ、うちおいで。」うちで1週間、10日、一緒に暮らします。もう大丈夫だって、家へ帰ると、また使う。もう一回来い。うちで1週間、10日やめる。帰ればまた使う。同じことを3カ月近く繰り返しました。

そんな6月24日、あいつの命日は25日です。もう18回忌が過ぎました。僕のもとに新聞持って来たんです。「水谷先生、悪いけどさ、おれ、先生じゃシンナーやめられねえや。先生じゃだめだ。この新聞に書いてあるぞ、先輩からもらった。シンナー、覚醒剤、大麻、薬物、ドラッグをやめられないのは依存症という病気。病気は専門病院の専門の医師の治療でなくては治らない。ここにさ、神奈川県立芹ヶ谷病院という専門病院が出てる。小・中学生ですら入院までして直してくれるって。薬物の専門病院。ここ連れて行ってくれよ。」そのとき大変な失敗して、僕はあいつを殺しました。むかつときて頭に来たんです。自分が根性ないからやめられないのに、こんなに我が子のようにかわいがってるのに、何でおれじゃだめだって言うんだ。おれの気持ちなんぞ何もわかってない。夜10時に、まとわりつくマサフミ、うそ言って追い返しました。「先生、きょう先生んち行っていいか。」「だめ。きょうはな、夜11時から神奈川県警と山下公園の公開パトロール。警察と一緒にパトロールは生徒は連れて出れんだろう。帰れ。」あいつ、振り返り振り返りエレベーターのほうに歩いて行きました。15メートルぐらい離れたとき、悲しそうに振り返って、「水谷先生、きょう冷てえぞ。」あいつの最後の言葉でした。そのわずか4時間後、自宅近く、上永谷の駅です。あの真ん前、今はマンションになったところに公園があった。あの公園で仲間2人とさよならシンナー。シンナー吸ってふらふらになって、シンナーからくる幻覚、ないものが見えます。多分ダンプカーの明かりが何か美しいものに見えたんでしょう。両手でつかむようにして飛び込んで行って死にました。即死でした。

すぐ病院に駆けつけた。一足先に着いたお母さんが暴れてました。「マサフミ、マサフミ、どこにいるの。会わせてください。」必死で警察官と看護師がとめてました。「待ってください、お母さん。今、処置中です。」お母さんを抱きしめ、ソファに座らせ、「お母さん、ちょっと待って。おれがまず会ってくるから。いいな、お母さん、落ち着いて。お巡りさん、看護師さん、おれは教員、大丈夫、入る。」処置室、入りました。頭をひかれてました。救急隊の方に感謝です。流れ出た脳みそをちゃんとボールに入れて、全部届けてくれていた。でも、おれの大事なマサフミの枕元で、一人の若僧の医者がぶるぶる青くなって震えてました。2人の看護師が、汚いものを扱うかのように、大事な大事な形見になるマサフミの洋服、無造作に鉢入れてました。キレました。「おまえら、どけ。さわるな。おれがやる。おれがやる。どいてくれ。洋服を全部丁寧に脱がせて、裸にして抱っこして、シャワーであいつをきれいに洗ってやりました。あいつの体から真っ赤な血がどんどんどんどん流れていって、あいつがこの手の中でどんどん軽くなる。どんどん冷たくなって、どんどん白くなっていきました。きれいに洗った後、処置台へ戻して謝った。ドクター、看護師さん、さっきは申しわけない。興奮していた。頼む、勘弁してほしい。頼むから手伝ってくれ。あの向こうで、こいつのたった一人のお母さんが待ってる。こんな姿じゃ会わせられない。顔面をひかれてました。鼻はつぶされ、眼球はなかった。脳みそを脳の中に全部おさめて止血をし、縫合し、鼻は段ボールで、顔の輪郭を脱脂綿で、丁寧に丁寧にマサフミに似せてつくって、きれいに包帯巻いて、まっさらな、真っ白の経帷子もらって着せて、お母さんに会わせました。お母さん、狂ったように包帯とろうとする。「マサフミ、マサフミ。」必死で押さえた。「お母さん、だめだ。マサフミ喜ばん。おれがいっぱい頬ずりしてなでてやったから、頼むから勘弁してやってほしい。」

2日後は通夜でした。校長、担任の先生が帰った後も、死んでもシンナー臭いマサフミの枕元で、お通夜のお線香をお母さんと交互にあげてました。夜中の2時過ぎ、マサフミが入っていた横浜連合、暴走族の連中が三百数十台のバイクで追悼暴走、花束持ってあらわれました。ブォンブォン。そのバイクの音が葬式やってる集会所の前でほんと止まった瞬間に、お母さんの顔が鬼のように変わりました。キッ。裸足で飛び出して行って、暴走族のリーダーの首根っこをつかんで、「人殺し、人殺し、おまえたちがマサフミ殺したんだ。マサフミ返せ、マサフミ返せ。」泣き崩れました。必死で抱き支えた。「お母さん、勘弁してやってください。こいつらもおれのかわいいかわいい生徒なんです。おまえたち、お母さんの言ってること、わかるな。だれだマサフ

ミにシンナー教えたのは。だれなんだ、マサフミにシンナー渡したのは。こんな悲しいことを二度と繰り返すな。花束置いていっていい。静かに散れ。」六十数束の花束がきれいにマサフミを覆いました。お母さん、朝まで何やってたと思いますか。「ばかやろう」、叫びながら、その花束一つ一つ持って、外へ飛び出して、地面に叩きつけて足で踏みにじってました。花には罪はない。でも、僕はとめられなかった。朝まで黙々と花束を片づけました。翌日、告別式が終わった後、お母さんから頼まれた。「水谷先生、火葬場まで一緒に行ってやってくれませんか。箸渡しする人がいません。」「いいですよ。」お母さんとたった2人、火葬場まで行きました。あいつ見送って1時間ちょっとで、ガラガラガラガラ台車に乗せられて戻ってきた。それ見た瞬間に、お母さんがとめる間もなく飛び込みました。マサフミ。80度、90度ある熱い灰、両手真っ赤にやけどしながら握りしめて泣くんです。何ていって泣いたと思いますか。「シンナーが憎い、シンナーが憎い。うちの子を2回殺した。」一度目は命を奪い、2度目は骨までも奪った。

あらゆる薬物、ドラッグを使うと、骨が残りません。大麻、マリファナや覚醒剤、S、MDMA、エクスタシーは、骨の中の髄、神経系、内部からぼろぼろ、すかすかにして、焼くと骨が残りません。シンナーは別格です。有機溶剤、有機物質を溶かす薬。つまり、油とカルシウム、一回一回の乱用が脳と歯と骨を物理的に溶かしていきます。僕はもっとむごいことをお母さんにしてしまった。お母さん、無理やり抱き起こして、箸持たせて、「お母さん、ほら、ここに、ここに、お骨あります。マサフミのために供養だ。一本のお骨でいい。箸渡ししてやりましょう。」大腿骨、太股の骨でした。本当ならこんな長くてしっかりした、人間の骨の中で一番丈夫な骨です。それが10センチ、5センチで3つだけ出てました。その10センチの骨に、お母さんと2人、箸と箸とをかけて、2人でそおっと、そおっと、そおっと持ち上げたんです。でも10センチ持ち上がり、箸が空を切りました。空中でお骨が粉々に砕け散った。その瞬間にお母さんが、うわーっと叫びました。もう何てことしてしまったんだ。何が何だかわからなくなりました。何分たったのか、だれかが肩をぽんぽんと叩いてくれて、ふと我に返ったとき、お母さんと僕と、この手です、4つの手で、こうやって灰かき集めて、ぎゅうっと握りしめて、悔しくて悔しくて、バンバン叩きながら、手で骨壺に灰を入れてました。肩叩いてくださったのは火葬場の方です。見るに見かねたんでしょう。ほうきとちりとりを持って立っててくれました。これ使ってください。これ使って、一粒の灰も残さないように拾ってやってください。灰を拾って帰ってきました。あの日から薬物との闘いを始めました。でも、残念ながら18年間で41の尊い命を失いました。

最後に、そのうちの一人の女の子の話で講演を終わりにさせていただきます。今からちょうど8年前です。僕は寒い時期というのは、終電が終わった後はモーター街に入ります。帰るすべを失った女の子たち、中・高生の女の子が一夜の暖のために中高年の男とモーターで買われる。それを防ぐためです。4月の2日でした。横浜駅で中学校の制服を着た女の子が60代の男とモーターに入ろうとしていた。男を追っ払って、女の子は補導しました。この子がアイでした。もう名前でも生きられない子です。かわいそうな子だ。いつもできのいいお姉ちゃんと呼ばれていた。小学校受験に失敗し、中学校受験では滑り止めすら落ちた。そのときお母さんが言った一言、「あんた、あんな中学も落ちるなんて、一体だれの子。」その一言で親を捨て、大人を信じることをやめ、ド派手な格好で夜の世界に入りました。アイは目立ち過ぎた。中2のとき、「あのアイっていう子、生意気、やっちまって。」7人の先輩たちに強姦されました。アイは明日を捨てた。もう私の体、汚れた。どうなってもいい。彼らの言うがままです。「アイ、シンナー欲しいんだろ。覚醒剤欲しいんだろ、体売ってこいや。」45人の中高年の男に体売りました。しかも全うな性教育を受けてない。外で射精すれば、出せば妊娠しないと、あの子は本当に信じていた。とんでもない。挿入時から微量でも精子は出ます。妊娠のリスクは挿入から射精まで、ほぼ若い時分は変わりません。それ以上に、コンドームを使わなければ、あらゆる性感染症が予防できません。アイの場合、偶然妊娠はなかった。でもクラミジアともう一つ性感染症、それ以上困ったことに、HIVプラスでした。

それがわかったその日からは、8カ月にわたる家出、我々は虞犯補導願というほとんど大人の指名手配に近いお願いを各47都道府県警、警視庁に要請しました。でも、8カ月とれなかった。彼女は長距離トラックの運転手さんに「おじさん、お兄ちゃん、私の体あげる、どこか連れてって。」行った先々でピルを飲んで妊娠を抑えた上で、1,000名近い中高年の男にコンドームをつけずに体を売りました。アイにとって生きるとは、一人でも多くの中高年の男にエイズをうつし返すことでした。8カ月後、やっと我が家に戻ってきて、我が家で心のケア、体のケア、医療的なケア、やっとあの子に夢ができました。「先生、あの制服のあのかわいい湘南の高校へ行きたいんだ。」1年おくれでかきました。でも、卒業はできなかった。

今から6年前、エイズ発症。12月でした。我々の持てる医学の力では対処できません。12月の入院から毎週のように病院に行っていた僕が、翌年の4月から病室に入れなくなった。いや、入っていいんです。アイがどんどん無残に変わる。つらくて会えなくなりました。ドクターから、

5月の連休後、電話がありました。「水谷さん、どうした。あんたの病気の進行か。」「いや、違う。おれはまだもつ。そうじゃない。いいかドクター、おれは教員だぞ。教員の仕事は、子供たちの明日をつくる手伝いをすることで、命にかえても大事な子供の死をみとることじゃない。いくらおれでも、子供の死をみとるのはつらいんだ。」ドクターから言われました。「水谷さん、気持ちはわかる。ただな、アイちゃんな、あんたの本読んじゃ泣き、写真見ちゃ泣き、アイちゃんは会いたんだよ、あんたに。アイちゃんの、あとわずかの明日に、あんたの力がいる。来てやってくれないか。」心を決めて、翌日病室に入りました。でも、もう言葉にならなかった。アイの枕元の丸いすに腰を落として、ベッドを歯でかんでうつ伏して、声を殺して泣きました。50キロ近くあったアイの体重、20キロ台前半、顔は骸骨、体は枯れ枝、全身斑点だらけ、真っ黒い唇、真っ黒く縁取られた目が、うれしそうに僕を見てました。僕が伏せて泣いていたら、あいつ、もう持ち上げるこのできない手で、ベッドの上をはわすんです。自分で、自分で、自分で、自分で。何分も何分もかけてはわせて、頭の横にきたら、必死で指の先で僕の髪の毛さわるんです。「いい子、いい子、先生、泣かないで。」そう言ってるつもりだったでしょう。アイの手と手をこうやって握りしめたら、あいつ、「先生、お願いがある。聞いてくれる。」「いいよ、アイ。何でも聞いてやる。」「先生、これからも講演やるよね。」「やるよ。だって、いいか、アイ、いくら先生がな、夜の世界の子供たちを笑顔で心優しい子にして昼の世界に戻しても、昼の世界が腐ってたら、攻撃的だったら、かえってその子供たちが殺される。いいか、我々大人は、教員は、いい子、優しい子をつくるだけじゃだめなんだ。いい子、優しい子が笑顔で生きられる、いい、優しい社会をつくらなきゃいけない。そのための私の、一番の先生の方法は講演。だから講演やるよ。」アイは言いました。「じゃあ先生、すべての講演でアイのことを話して。アイってばかな子がいて、中学受験の後の親の一言で親を信じるのをやめ、心を閉ざし、派手な格好、派手な化粧、派手な服にあこがれ、夜の世界にあこがれ、夜の世界に入り、だまされ、汚され、体を売らされ、HIVにされ、エイズでもだえ苦しんで死んでいったって伝えて。後輩たちに教えてやって。人の美しさは髪の毛の色や化粧や派手な服じゃない。その人の生き方、生きざま、心の美しさや優しさにあるって。もう一つ後輩たちに教えてやって。夜の世界は哀れな哀れな悲しい世界、幸せなんかないよ。傷ついた、傷つけられた者同士が、互いに寄り添って助け合うどころか、お互いの足を引っ張り、つぶれていく世界、幸せは昼の世界にしかないって伝えて。もしもね、先生、一人の子でも、一人の後輩でもアイの話聞いて夜の世界から昼の世界に戻ってくれ

たら、アイがこの世に生きてって意味があったっていうことになるよね。もしもね、先生、一人の子でもアイの話聞いて、昼の世界から夜の世界へ行かない子出たら、あの世へ行って神様「アイちゃん、よくやったね。」ってほめてくれるよね。先生にしか頼めない。」「いいよ、アイ、すべての講演でアイのこと話してやる。」約束をしました。

それからは毎週のようにアイの病院へ行っていました。でも運命の日が来た。7月14日、点滴によるモルヒネの連続投与開始です。点滴でモルヒネを打って行って、量をどんどんふやしていき、意識をもうろうとさせ、死の恐怖を和らげ、心臓を弱らせ、2カ月程度で眠るように死なせてやるはずでした。アイの選んだ最後のお別れの服装は、大好きだった高校の制服だった。だぼだぼになった制服をお母さんと看護師長さんが泣きながらまつり縫いで合わせてくれました。アイの斑点だらけの体、長い入院生活で本当にいいお友達になってくれた4人の若い看護師さん、それから師長さん、お母さんとお姉さんがみんなでお風呂に入ってくれて、きれいに洗ってくれて、髪の毛編んでくれて、体じゅうの斑点、唇も目の周りも白くつぶしてくれた上、淡い淡いお化粧品してくれました。アイの最後の言葉は「父さん、ありがとう。母さん、ありがとう。お姉ちゃん、ありがとう。水谷先生、ありがとう。」でした。

でも、むごかった。アイはモルヒネで眠るようには死ねませんでした。アイはシンナー、覚醒剤、大麻、ありとあらゆるドラッグを乱用していました。薬物を乱用すると麻酔がきかなくなるんです。同じだからです。9月末、規定最終単位数のモルヒネを打ち終わって、心臓は止まってくれません。地獄でした。今度は心臓の止まる日まで、3日に数時間、どうしてもモルヒネの禁断症状の時間がくる。あいつが意識ないまま、「ウォー、ウォー」って暴れると、関節という関節が音を立てて抜けていくんです。最後は包帯、タオルケット、毛布で、ミイラのようにぐるぐる巻きにしてやって、押さえてやることしかできませんでした。その苦しみの中、10月15日未明にあいつは息を引き取りました。最後の数分、目をかっと見開いて、僕に訴えて死んでいった。目はこう言ってました。「先生、助けて。死にたくない。死にたくない、死にたくない。」でも助けられんです。最後驚いたような目をして、それから僕をにらんで死んでいった。目はこう言ってました。「先生、何で助けてくれないの。私、殺したの、あんただ。」これが水谷の生きる夜の世界です。

子供たち、君たちがこれからの人生、ふてくされ、僕の住む夜の世界に入ってきたら、君たちの足元にアイが落ちたのと同じ穴、日本のどこでも口を広げて待ってます。子供たち、いいかい、

君たちはね、一人ひとりが宇宙にたった一つしかない、尊い尊い花の種、たった一つしかないんだから、だれと比べる必要もない。だれをまねることもない。君たちはその花の種を自分の力で、長い自分の人生の中で咲かすんです。でも、君たちの花の種は、暖かい太陽の下、昼の世界でしか咲かんのです。昼の世界で水谷が殺した117名、水谷の分を入れて118名分、幸せな花を咲かせなさい。

そういえば逗子の皆さん、僕のもとにはよくこういうメール、電話、相談が来ます。皆さんどう思いますか。自分の命は自分のもの、死んでもいいよね。自分の人生自分のもの、どう生きようと勝手だろ。こう思っている人も多いと思う。私はこう返事を返します。水谷は悲しい、でも教えてあげる。君の命は君のものではない。君の人生も君のものではない。君に預けられた、託されたものだ。私は今から3年前、筑紫哲也と一緒に沖縄を講演で回っていました。筑紫は僕にとって兄であり父です。筑紫から頼まれた仕事を、僕は一度も断ったことはありません。筑紫から誘われ、ある「がま」…沖縄では洞窟を「がま」と言います。そのがまに筑紫の奥さんと筑紫と僕と、それからその遺族の方々と花を手向け、お線香をあげ、お水をあげ、お参りをさせていただきました。そのがまは、1994年、アメリカ軍の軍事資料の公開によって、50年後の公開です。その最後が明らかになったがまでした。そのがまには、1945年4月、あの4月1日、何とエイプリルフールの日から始まったアメリカ軍による沖縄上陸作戦、あの悲惨な戦いのとき、724人の地域のおじいちゃん、おばあちゃん、父さん、母さん、子供たち、赤ちゃんが逃げ込みました。丈夫ながまでした。アメリカ軍の猛烈な艦砲射撃、爆撃にもびくともしなかった。でも、あまりにもアメリカ軍の上陸地点に近すぎたんです。アメリカ軍は上陸直後にそのがまのたった1カ所の入り口の前を通りました。がまの奥から赤ちゃんの泣き声が聞こえてしまったんです。中には日本軍人なんか一人もいなかったのに、アメリカ軍は確認もせぬまま爆弾を放り込み、何十発もの手榴弾を投げ込み、火炎放射と機銃掃射、始めたんです。中にいた大人たち、どうしたと思いますか。一番奥に子供たちを集めて、抱きしめ、頭をなで、一人、また一人とその爆弾の上に手榴弾の上に身を投げた。自分の体で、命で子供たちの命を救おうとした。一人、続いて一人と、小さな岩を腹に抱いて、わーっと叫びながら洞窟の入り口の炎に、銃弾に自分の体を叩きつけていった。自分の置く岩と自分の屍でアメリカ兵から炎から、銃弾から子供たちを救おうとしたんです。生き残ったのは、わずかに12名です。

2日後にアメリカ軍によって救出されたのは、すべてが歩けない赤ちゃんのみです。どういう

ことかわかりますか。君たちと同じ高校生、中学生、小学生、それどころか2歳、3歳、4歳、歩ける子すべてが小さい岩を腹に抱いて、よちよちと炎に、銃弾に、自分の体を叩きつけていったんです。アメリカ軍の公開資料にあります。幼児すらもが神風アタック、突撃攻撃をしてきた。爆弾じゃなかった。岩だったんです。どれだけ痛かったか。どれだけ無念だったか、悔しかったか、つらかったか。

子供たち、覚えておきなさい。今おまえたちが生きているということは、人類の誕生から一度も命の糸が絶えることなく紡がれてきたということです。君たちの先祖、祖先、だれ一人が、君たちの先祖、祖先を産まずに死んでも君たちはいないんです。でも、その命の糸を守るために、数えきれないほど多くのおじいちゃん、おばあちゃん、父さん、母さん、子供たちまでもが命を捨てて守ってくれているんです。我々こうやって生き残っている人類よりも、この一つ一つの命を守るために滅んでいった、命を捧げ、死んでいった方々のほうがはるかに多いんです。子供たち、いいか、おまえたちの命はそうやって歴史の中で無念の死を遂げざるを得なかった数えきれないほど多くの人から預けられた、託された命なんです。この命の糸、絶やささないで。だから子供たち、君たちは生きて、生きて、生き抜くんです。そして君たちの命を次の命につなぐんです。だから私たち大人は、命を捨てても君たちを守る。君たちの子や孫が生きる、この星を、環境を、この国を、この地を守るんです。命の尊さを子供たち、忘れないでください。いいかい、これから先、死にたくなったら、ふてくされなくなったら、夜の世界へ入りたくなったら、リストカットしたくなったら、思い出せ。学校通いたくなくなったら。あの広島や長崎の原爆の炎の中で、どれだけ多くのおじいちゃん、おばあちゃん、父さん、母さんが背中を炎に焼かれながらも、せめてこの子の命は、身を捨てて子供たちを守って死んでいったか。どれだけ多くの君たちと同じ中高生のお兄ちゃん、お姉ちゃんが、太田川の運河のお堀の一枚の板に幼い弟、妹の身を託して、せめて弟は、妹は。水面に沈んでいったか。君たちの命は君たちのものじゃない。君たちに預けられた、託されたものなんです。命の尊さを忘れないでください。

つらい話を後半に持っていったので、最後に18年の僕の戦いの中で、最も幸せだった話を最後にもってきて講演を終わりにします。今からちょうど8年前です。2月10日でした。僕は神奈川県藤沢の村岡中学という中学校で講演会をやりました。3年生3クラスに。講演終わった後、1人の子が手を挙げたんです。「先生、質問。」「どうぞ。」って言ったら、「先生、どうやったら僕たちにその怖い薬物や悪の魔の手が近づかないかな？」男の子が質問してきました。「いい

質問だね。笑顔だよ。笑顔があふれる家庭、笑顔があふれる地域、笑顔があふれる学校に薬物や悪の魔の手なんて近づかないよ。」「先生、もう1個聞いていい?」「どうぞ。」「どうやったら笑顔あふれる?」って言うんです。そうだな、それを教えなきゃな。あいさつ、声かけやっごらん。いいか、朝起きたら、じっちゃん、ばっちゃん、父ちゃん、母ちゃん、兄弟、おはよう。いいか、美しいものにはみんなおはよう。青空おはよう、白い雲おはよう、アリさんおはよう、近所もな、お年寄りの名前をできるだけ覚えろ。ごろべえさん、おはよう。ちゅうざえもんさん、おはよう。おいちさん、おはよう。おはつさん、おはよう。いいか、学校行ったら、先生おはよう、友達おはよう、後輩おはよう。声かけてわかるか。朝、若い先生がな、つらそうな顔でいたら、「おお、先生、失恋か、二日酔いか、おれがなぐさめてやるか。」やってみろ。友達や後輩がつらそうな顔でいたら、同じ目の高さで、ただ一言「ついてるよ。」お年寄りがな、重いごみや荷物もっていたら、それは言葉だけじゃだめだ。おばあちゃん、おじいちゃん、無理するなって、運んでやれ。

この子供たち、心が優秀だった。僕が帰った後で3クラスで臨時の学年集会、卒業式の3月10日までの1カ月、後輩たちに明るい地域と学校を残してから巣立っていこう。クラス対抗あいさつ声かけコンテストを始めた。3年付の先生と校長先生、悪のりして、1等をとったクラスにラーメンごちそうしてやるよといった。ちなみに、この学校の横には、かの有名な幻の醬悟という有名なラーメン屋があります。いつ開いてるかもわからず、時間も不特定という、日本で一番うまいというラーメン屋です。そこでごちそうしてやるよと言っちゃったんです。子供たち、燃えたんです。「おい、おれよ、きょうわざと大船駅経由遠回り、71回、おれがトップだな。」「違う。おまえ、何で大船駅の下まで来たんなら2階の改札来てくれないんだよ。おれなんてクラスのためだから、恥ずかしかったけど、駅長さんの許可もらって改札の横で学校からカウンター借りて行って政治家やっちまった。おはようございます。おはようございます。おはようございます。おはようございます。378回、もう二度と行かないぞ。」この学校の校長から分厚い手紙が5月に届きました。手紙の中には手紙のコピーが入ってました。私はそれを読んで、ひさかたぶりにうれし泣きに泣きました。こういう内容でした。

私は村岡中学の通学路に住む72歳のおばあちゃんです。今から10年前に連れ合い、夫を亡くしました。私には子供も孫もおりません。この10年間は、いつお迎えが来るか待ち続けた10年でした。そうしたら2月の中ごろから、おたくの生徒さんたちが、私が朝、道を掃除していると「お

ばあちゃん、おはよう。おはよう。」って声をかけてくださる。持ったことのない子、持ったことのない孫を持ったような、とても幸せな気持ちにさせていただきました。またあのころから幾人ものおたくの生徒さんや卒業生が、私の重いごみや荷物運んでくださったり、あるいはお茶飲み友達になってくださったり、おたくの生徒さんは、この年寄りのころに人生最後の花を咲かせてくださいました。最後のせめてものお返しにと、この春、花の種や球根をたくさん買ってお庭に植えました。一生懸命育てて、咲いたらお届けします。子供たちの教室に返してやってください。

人間っていいものだなと思いました。何か今の時代、優しさを出すことがみっともないことや弱いことのように思われてる。でも、人から優しさをとったら、そこには獣しか残らないんです。実は僕は全国各地のJC、青年会議所の若者たちと8・3運動という運動を今、全国で広めています。8時、3時、つまり子供たちの登・下校時間に、できるだけ多くの大人たちが、おじいちゃんが、おばあちゃんが、通学路に出よう。そして子供たちを優しい目で見つめるんです。下を向いている子がいたら「どうしたの。」元気な子がいたら「いいことあったんだね。」って声をかけるんです。考えてみてください。この逗子で、朝な夕なに多くの大人たちの優しい目と声が子供たちを包み込んだら、どんな悪や薬物の魔の手がこのまちに入ってきますか。このまちで育った子は、人の優しさを信じ、人に優しさを配ることのできる子になってくれるんじゃないんでしょうか。

そうだ、最後に聞こうかな。10代の子たち、あしたから学校行く途中、お年寄りが重いごみもっていたら、「おばあちゃん、無理しないで。」って手伝ってくれる10代の子、手を挙げてください。偉いぞ、それでいいんです。ぜひこの逗子を本当に優しいまちにしませんか。子供たちがお年寄りのお手伝いをし、子供とお年寄りの間に本当にあるいは大人と子供たちの間に優しさが通じ合ったら、どんな悪や薬物がこのまちに来るでしょうか。それにはお金は一銭もいらなんです。明日から、きょうまずここにいる皆さん一人ひとりがまちに出て動けばいいんです。このまちが優しさに満ちるまちになると信じて講演を終わりにさせていただきます。きょうはどうもありがとうございました。（拍手）

【司会（杉山）】 水谷先生、本当にすばらしい講演をありがとうございました。もう一度先生に盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

では、ここで後半に入る前に、壇上を整えさせていただきますので、少しお時間をちょうだい

いたします。

それでは、準備が整いましたので、後半のまちづくりトークを始めさせていただきます。

では、水谷先生、市長の登場です。お2人とも、どうぞ。

後ろから登場というサプライズになっております。

【平井市長】 皆さん、こんにちは。（拍手）どうでした、きょうお話をお聞きになって。

【市 民】 とても感動しました。

【平井市長】 感動しましたって、水谷先生。

【水 谷】 でも、こんな話が必要のない国、時代にならなきゃいけないんだと思います。でもね、逗子はいいまちですよ。僕の講演というのは、日本じゅうこの間も鶴舞で2,000人の会場に8,500なんです。2回打ったんですが、これしか集まらないということは、それだけ僕を必要としてない。市長がきちっとやってるということでしょうね。

【平井市長】 いや、すいません。私も、いや、ちょっときょうおかしいな、400人は来るはずだったんだけどなと思って。

【水 谷】 いやいや、僕は本当に、だって逗子の教育、逗子で僕も子供に教育受けさせてまして、やっぱり夢ですよ。荒れてるところが非常に多い、苦しんでいるところが。その意味では、本当にいいまちだと思ってます。まちづくりトーク、ここで始めたんじゃ…。

【平井市長】 せっかくだから、何かここで感想を聞きたいなと思って。いかがですか、ちょっと。

【市 民】 いや、すばらしいお話でした。感動そのものです。

【市 民】 身につまされるお話、たくさんいただきました。

【平井市長】 御主人、ほめてましたか。あなた、ほめてましたか。

【市 民】 はい。ほめられることも、けなされることも。

【平井市長】 ありがとうございます。手が上がってますね、どうぞ、どうぞ。

【市 民】 きょうは本当にありがとうございました。私もよくわかりませんが、本当に夜回りなんかしないようになることが一番望ましいんだとおっしゃっていたとおりでと思います。実は私もちょっと非常勤講師を17年間ほど続けていたんですけど、一番悲しかったことが、高校1年、2年くらい、まだ10代だというのに、自分はだめだと思い込まされてきてしまって、思い込んでいることでした。本当に悲しかったんです。本当にきょうのお話にもありましたとおりで、親とか

学校の先生とか周りから、ただ成績が悪いというだけでだめだとか、そう言われてきているという子供たちのことが本当に胸が痛くなりました。

ただうれしかったのは、私もそのことを言って、まだ若いんだからと言ったとき、私が言ったのはわかってくれなかったのですけれども、一人の高校生がそのことをよく聞いていてくれて、先生、僕たちまだ若いんだから、自分で悪いなんて思い込んじゃいけないんだよなって言ってくれたら、ほかの生徒たちも本当にそこでうなずいてくれたということがあったんですね。ですから、やっぱり先生がおっしゃったように、本当にやっぱり相手を愛する心があれば、何らかの形で通じてくれるんだということ、本当に思います。

今、私たち更生保護助成会でもあいさつ運動というのをやっています。本当にうれしいことは、小学生のほうからあいさつをしてくれることもあるということなんですね。だから本当に逗子のまちは、今ちょっとおっしゃってくださって、ありがとうございました。

【平井市長】 ありがとうございます。それでは、トークということなので、少し壇上の上からまた次の2部を進めさせていただきたいと思います。

皆さん、本当にきょうはお集まりをいただきまして、ありがとうございます。本当に迫力のある講演で、私も感動させていただきました。こういう方が逗子の市民であるということ、大変誇りに思っております。どうぞこれから30分弱ですけれども、水谷先生と会場の皆さんと少しトークを進めたいなと思っております。よろしく願いいたします。

先生、私も去年、おとしですかね、水谷先生と対談をさせていただいて、そのときもやっぱり9ほめて1叱れということと言われて、それから、そうだよな、ほめなあかんなんて思っているんですけども、なかなか私も子供、今3人いますけど、ほめてあげる割合がどうも叱るよりも少ないかなというのは、いつも反省しているんですけど。どうすればこれがうまくね、いくのかなというのがすごく、いつもいつも考えさせられるんですが、何かいいヒントありませんかね。

【水谷】 実は今、僕は逗子が本当に大好きなんですね。なぜか。正直言って、日本で最も恵まれているまちの一つだと思います。私は今、年間で大体300から400の講演、ということは300、400都市を、村々まで合わせて歩きます。通算で3,000回を超える講演を12年間でやってきた。日本各地を見ていきます。この間行った大阪の浪速区、60%以上が生活保護世帯です。家庭は飽和、崩壊状況、そんな中で、地域すらも子供たちを守れなくなる状況になってます。そんな中で、逗子はすごく教育に対する市民の意識も高いし、役所の動向もいいし、すごくいいと思ってます。

でも、この逗子の中でもやはり僕がちょっと知り合った子たちを見ると、家庭的に恵まれなかったり、いろんな追い込まれている子、心を閉ざして不登校になっている子たちはたくさんいるんですね。その家庭を変えることというのは、なかなか難しい。行政であっても強制的な、いわゆる暴力があれば児童相談所が介入できますけれども。むしろこれだけ意識の高い、恵まれた逗子だからこそ、逗子市民にとって逗子の子供たちはみんな我々の子なんだ。みんなで守り続ける、これだけある意味で小さいからこそ、密にそういうことができるんじゃないか。それをお願いしたいなと思って、きょうは講演に来たんですけれどもね。

【平井市長】 皆さん、どうですか。自分はほめているほうが多いよなって、さっきぱらぱらっと手上がりしましたが、どんな今、思いで自分の子育てなりを感じているのかって、もし御意見があったら発言いただければなと思うんですけど。あ、手が上がりました。

【市 民】 きょうは先生、お話ありがとうございます。まず最初に、水谷先生に直接お礼が言いたくてマイクのほうをお借りしています。私はちょっとしたきっかけで、先生の御著書を5～6年前に拝見しまして、青少年と薬物依存の問題の大きさに、そのとき初めて知りまして、大変衝撃を受けて、考えさせられまして。私、今、4年生と3年生になる甥っ子がいるんですけど、私は独身なんですけれども。いるんですけども、当時もっと小さかった、年長さんとか1年生ぐらいだったんですけども、まだ子育てに忙しい私の義理の妹に、これは大切な問題、今は無関係かもしれないけれども、将来どういう子供になるかわからないし、これは重要な問題だということ、私が先生の御著書を暗記して、そして子育てに忙しい義理の妹に口頭で内容を伝えるという形で共有しまして、それで本当にこういう問題があるんだねということ、家族でそういう話し合う機会を得ることができて今に至るんですけども。ちょっと私も仕事のほうが忙しくて、そのままばたばたしておりまして、いろいろ先生にはお手紙とかメールとかしたいと思いつつも、そのままきてしまったんですけども。昨年…つい先日、テレビがあったりして、それも見られなかったんですけども、今回、逗子市に先生がいらっしゃるということで、きょうはやっと先生のお話を直接伺うことができ、大変うれしく思っております。ちょっと長くなっちゃったんですけども、そういうことで、先生にきょうは直接お礼を言えて大変幸せに思います。

質問のほうなんですけれども、私はそういう形で、親ではないんですが、甥っ子がとてもかわいくて大好きで、いつも過激に遊んでいるんですけども、そのときに私はいつも先生の御著書

を拝読しましたので、ほめることの大切さというのを私なりに意識して接してまして、私はほめて、かなりほめているほうだと思うんですけども、何かの本を読みますと、逆にほめ過ぎということもあって、ほめられ過ぎると感覚が、ほめている、ほめられているほうが普通になってしまって、ほめられないと何か逆にすねてしまったり、スネ夫になっちゃったりとかということがあるなんていうのを読んだりすると、ちょっとほめ過ぎも、何かしていると、とにかくいいところ、ここはいいな、例えばにこっと笑ったときに歯がきれいだったら、きれいな歯だねとかという、何かを見つけてほめる、瞬間的にほめるというふうにはしているんですけども、もしかしたら私はほめ過ぎなのかなというのをちょっと感じることもあるので、ほめかげんというのがあるのか。あるいはほめ過ぎというのはない、どんどんほめていいのか、このまま私はほめ続けていいのかというのを先生にお聞きしたいということと、あとごめんなさい、最後に市長にメッセージなんですけれども、先ほど水谷先生からも逗子市の教育に対する意識の高さというおほめの言葉があったんですけども、私も大学院生なんですけれども、4月からなるんですけども、いろいろ受験勉強とかしてまして、逗子市というのは本当に老若男女、だれでも、どこでも勉強している市なんです。それが何ていうんでしょうか、若い方も、私のような社会人も、すごくブレンドしていて、ミックスしていて、自然にテーブルの上で勉強ができる。そういう環境、とても、私はほかの市から移住してきたんですけども、それはとてもすばらしい環境だと思います。ですから、逆にほかの市ですと、学生が図書館なんかでも、自習室はなしにして、閲覧のみにして、学生さんが勉強ができなくて、どこに行くかという、マクドナルドに行って…マクドナルドなん固有名詞出してしまっちはいけないのかもしれないんですけども、そういうカフェとかに行って勉強したりとか、そうするとやっぱり水谷先生の夜の世界に、やっぱり一步を、図書館で勉強できていれば、そういうところに行かなかったのに、そういうところに行かざるを得ないという、今は勉強という目的があるからいいけれども、それがまた違う世界にもつながりかねないという、そういうのが結構普通のほかの都市ではある中で、逗子市というのは本当に若い方もいろんなところで勉強しているの、だれも怒られないし、むしろ何か一応社会人優先とかパソコン優先とかになっているけれども、でも若い方が勉強していても、だれも怒られない。そういうのがすごく私はいいと思うんですね。ですから本当に、もっともっとそういう席ですとか若者がどこでも勉強できる環境を市としてもつくっていただきたいし、そういう意欲のある若者が勉強できない市というのは、私は基本的に発展することはないと思っているので、そうい

う環境を、できるだけ多くの子供が夜の世界に行かないで昼間の世界でそういう勉強だとかいろいろなことでも自分のことを表現することができるような環境を大人がつくっていくような市にしていきたいと思うし、していただきたいと思います。ごめんなさい、長くなりまして、すいません。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。

【市 民】 お礼と、先生へのお礼と質問と市長へのメッセージでした。ありがとうございます。

【平井市長】 水谷先生、どうですか。ほめ過ぎなんていう悩みはあまり聞いたことないんですけど。

【水 谷】 ほめるのは、いくらほめてもいいんですよ。ただ、僕をよく誤解してね、叱ってはいけないと考えてしまう親御さんがいる。叱るときは叱らなきゃいけない。僕だって怒りますよ。悪いことをやったら。それはそれで、バランスとかいうのはないですから、いいところはどんどん認めてやっていいと思うんですね。それから市長、知ってますか。女性を簡単に美人にする方法が2種類ある。

【平井市長】 2種類、ぜひ教えてほしいですね。

【水 谷】 1つは1億円かかります。もう1つは0円です。1億円かかる方法というのは、その相手の女の子を中心に女性のドラマをつくるんです、テレビで。女の子というのは、本当におもしろい。僕はテレビの世界に今おりますが、カメラが追っていけば追っていくほど自信がついて、内側から輝きが出てくる。これはなかなか難しかったら、いいですか、ここにいるお父さん方、自分の女房を毎日ほめ殺すんです。きょうはすてきだよ、おまえ、いいね、優しいね。ほめられればほめられるほど、自信がついて輝いてくる。これなんですよ。だから、それにはいくらほめたからって、別にほめ過ぎはないんです。子供たちをほめて自信が増せば増すほど、いじめられなくなるし、不登校にならなくなるし、いじめなくなるし、悪の道に行かない。もうそれは鉄則だと思います。いっぱいほめてやってください。

【平井市長】 最近、ほめサイトというのがあるらしいですね。インターネット上で。まだ見たことないんですけども、ぜひ皆さん、一度見ていただいたらいかがでしょう。先生のいろんな記事なんかを私も読ませていただいて、夜の世界の子供たちと接するときにかける言葉、「いいんだよ」というね、ことをまず投げかけるということを読んだことがあるんですけども、それに込

められた気持ち、意味、何でしょう。

【水 谷】 僕はね、自分の人生で子供に言ったことのない言葉、だめだよ、考えろ、頑張れ、この3つの言葉は、僕は大人としても教員としても、一度も使ったことがない。例えば頑張れという言葉をおまへにかけるといことは、おまへは頑張っていないんだぞという否定なんですね。考えろって子供に言うことは、おまへは考えてないということなんですね。だめだよというのも、そんなの言う権利もないだろう。過去は返れないし、今、例えばふざけたことしたり犯罪を犯した子であったりシンナー使ったり体を売っていても、その子がそこまで至るには十何年の、僕が扱う子ですから15、16、17年の歴史がある。もうそれはそれで、結果としてこうなったものを責めてもしょうがないんですね。いいんだよ、よく生きてきたな。ここから一緒にスタートしようよという。実は僕の夜回り先生がミリオンセラーになったというのは、この「いいんだよ」言葉を子供たちが探していた。待っていたんだと僕は思いますね。実は日本では流行語大賞をとれなかったんですが、韓国では「ケンチャネヨ」というんですけどね、あれは流行語大賞をとりました。

【平井市長】 ぜひ会場からも、ぜひという方…手が上がりましたね。どうぞ。

【市 民】 御講演ありがとうございました。先生と同じ逗子の空気を吸えているんだと思うと、何だかとてもうれしくなりました、ありがとうございます。今、大学1年生の男の子がいて、小さいころ、子供が私は3人いるんですけども、その長男も含めて下の子たちとやはりその子たちが2歳とか3歳、6歳ぐらいまで、かなり感情的に叱ったりすることが身に覚えはあって、もう10歳以降は自分では怒っていないつもりで、ほめているつもりで、でもやはり特に一番上の大学生の子は、やっぱり感情的に怒られたというんですね。私は素直に謝れない。そのときはそのときなりに、私は私なりに一生懸命育てたんだという言いわけをしてしまう。どうすれば…もう子供も大学生だし、わかってくれているんじゃないかと思う部分もある。私は子供に何と云えばいいのかなというのを、もし先生、何かあったらアドバイスを。

【水 谷】 「ごめんね」しかないですよ。我々大人だってミスはするわけで、僕は生徒に一番言った言葉は、多分「ごめんね」だと思いますよ。失敗するたびにちゃんと謝ってました。できないことはできない、わからないことはわからない。やっぱり正直であるべきだし、あとは自分の弱さを見せることですよ。大人だから強いわけじゃない。僕はかつて「夜回り先生」というのは、あれは3冊で終わった本なんです。1が「夜回り先生」、2が「夜回り先生と夜眠れない子

供たち」、3が「夜回り先生の願い」。もうこれ以上はつらくて書けないんです。死んだ子のことを書くから。1、2で徹底して大人を責めたんです。大人は悪い、子供たちを追い込んでいる。大人は悪人だ。わかっていたんですよ、大人も苦しんでいるのは。だから3巻目に「夜回り先生の願い」で子供たち、大人を許してやろうよ。大人も苦しんでる。あれは和解を中心に書いた本なんです。だから、もっと素直にやることですね。

よく聞かれます。15年たってこの子がこんなふうになって、どうやったらいいんだ。だからもう15年を取り返すには、もう15年、そこから始めましょうよと。例えば大分県知事は広瀬という、広瀬さんというのは僕の友人なんですけれどもね、僕をパクったんですが、僕は「川の字の日」をつくろうという、よく講演で言っていたんです。結局、一家みんながテレビも消し、畳のところで布団を敷いて川の字になって、御飯もそこでちゃぶ台で食べ、一日ともかくそういう電話、そういうものを全部文明機器をとって、腹を割って話し、そこで謝って、あるいは許し合って、悩みを言い合って、お父さんが会社の悩みを言ってもいい。ふれあう日をとという話を。そうしたら広瀬知事は何と大分県は第3日曜を「家族の日」、できるだけ家族でいてくれという、そんな条例にまですることかという気はします。そういう日をつくってみたらいいんですよ。きょうはママの謝る日、言いたいこといくらでも言ってもいいよ。本当にごめんね、つらいときは泣けばいいし、抱え込まないことです。大人が肩を張ってね、頑張れば頑張るほど子供たちは遠くに行ってしまう。僕はね、強そうに見えて弱い人間、よく子供の前で泣くしね。でも、どんな言葉よりもね、涙が子供たちの心を溶かしてくれたりするんです。素直になりましょう、お互いに。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。お隣の方も手が上がってましたよね。

【市民】 どうもありがとうございました。個人的なことなんですけれども、今、私の弟が今年の11月に20歳になったんですけども、今、家出を、3回目の家出をしまして、今、もう1週間たつんですけど、全く連絡がとれない状態になっているんですけども。私の家は母親が11~12年前に家出をしまして、弟が8歳のときから母親がいなくて、それからもういい子で、いい子でというので育ってきた子なんです。それで、弱さを見せないし、思っていることを言わない。私がそれを心配して、母親のかわりに、言いたいことは言っているんだよって何度も言っているんですけども、言わないで、高校生のときは高校1年の夏に自転車で群馬から静岡まで行ってみたり、高校3年のときは、私、実家が群馬なんですけども、群馬から京都まで無断で行ってみたり、そして制服を捨てて京都で働こうとしたりしていたみたいなんです。今も大学生なんですけれ

ども、大学もバイトも無断で、何も言わずに家を出て、携帯電話もつながらずに今、1週間どこで何をしているのかもわからない状態なんですけれども、そんな、もう20歳なんですけど、そんな弟に何を、どう更生というか、どういうふうに声をかけてあげれば…。

【水谷】 いいですか。すごい、いいじゃん。いい弟だ。生きる力がそれだけあるっていうんで、今は引きこもって30、40でも家から出ずに、何もしなくて苦しんでるのに、自分から金くれとも言わず、外の社会で自立をしようとしてるとするのは偉いから、それはそのままにしておいてあげて。むしろあなたが依存してるのかもしれない。お母さんのかわりをやって、この子がいてくれないとって。それぞれ、君は君で生きていけばいいんですよ。よくね、思うんですけれども、市長、今すごい困ったことが起きてて、例えばインターネット上のいわゆるメンタル系のサイトなんていうのは、自分がリストカットやって死にたい。だからだれかを救うことで自分が救われようとする。　　ですよ、両方で。いいですか、人を救おうとしたら幸せにならないと、幸せな人間しか人は救えない。あと、だれかを救うというのは、結局できない。よくね、勘違いして、水谷はたくさんの子供たちを救ってる。うそですよ。僕は救っちゃいない。僕は教員だから教えてはいる。だってね、だれかにトイレ行ってもらったら、トイレ行かなくて済む。だれかに御飯食べさせてもらったら、おなかいっぱいになる。自分で食べなきゃならないし、自分でトイレは行かなきゃならない。救いなんていうのは、どこにもない。自分の足で求めて、自分でつくるしかない。君の弟は、それを自分の力でやってるんだから、そのまま見ていてあげてごらんなさい。いつかきっと助けてくれるよ、姉ちゃん、しっかりしろって。こんなところでいいですか。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。もうあとちょっとしか時間がないんですけれども、ぜひ言っておきたいこと、あれば。ちょっと先ほど御発言がありましたので、ほかにぜひ。ありませんか。あ、手が上がりましたね。マイクをお持ちしますので。この間、私、1週間前に逗子小学校の6年生の社会科の授業をやりましてね、160人前に。それで、きょう実はこの会場に来るときに、多分6年生でしょうね。すれ違いざまに「こんにちは」ってね、あいさつしてくれたんですよ。すごくそれがうれしくてね、やっぱりそれがさっき8・3運動ってね、おっしゃっていただけど、地域としての原点なんだろうなというのを、すごく感じたので、ぜひ皆さんも何かね、投げかけてあげると、絶対返ってきますからね。そんなことをすごく感じました。どうぞ。

【市民】 きょうはとても力強い講演をありがとうございました。ちょっと近くの養護施設でボランティアで勉強を教えておりますけれども。子供というのは環境が恵まれているとか恵まれ

ていないということにかかわらず、勉強したいという気持ちは奥底に持っているというのを常に感じておりました、先生が接している夜のまちで生きるお子さんであっても、本当に勉強したいという気持ちが奥底に秘めているのではないかと思います。

それで、私は主要5教科、それから技能4教科の中で、何か一つでも好きな科目が見つかって、それがあと職業に結びつくように支えてあげるのが大人の務めじゃないかと思っています。先生は何かお金のために働くとか、そういうことじゃなくて、本当に勉強、自分の力として好きになるためには、どのようなことを努力なさったのか、そういうことを現場の教員として生活の中からどういうところで勉強を好きにさせていってあげられたのかをちょっとお聞きしたいと思います。

【水谷】 勉強についてはね、僕、子供にね、勉強しろって言ったことないですよ。知ってますか。学校の教員と親と先生…大人たちがついていて、子供たちについている一番ひどいそ、やればできる。うそですよ。やればできますか。僕、スケート練習したらイナバウアーできますか。サッカーの岡田さんは友人だけれども、僕がサッカーをちょっと勉強したらね、ナショナルチームの監督になれますか。人には人の分があるんですね。

実は、これは子供をばかにしているんじゃないで、子供というのは無限の可能性を持った存在ですよ。そんな中で小・中・高校が5、4、3、2、1をつける。体力、技術、知識、能力なんて、これっぽちのものだ。ここだけで判断されるから、落ちこぼれさせられた子供たちがたくさん出てしまうんです。ある子は魚をとることが宇宙一かもしれない。ある子はお年寄りに対する優しさ、ある子は花を育てること、その無限の可能性の中で、その子だけがすぐれているものを、みずから気づき、引っ張ったり押ししたりじゃなくて、いい人との出会い、いい本との出会い、いい環境との出会いを与えながら、みずからそれを咲かすのを助けるのが本当の教育であり子育てだと思ってましたね。だから、僕の基本というのは待つことでしたよ、教育の基本は。僕は生徒にこうしろ、ああしろ、言ったことはない。ただひたすら待つんです。そのかわり、いい題材とか出会いとかをつくりながら。それをゆっくりやっていけばいいと考えてます。

あと、ぜひね、この際、お願いをしたいのは、皆さんにもわかっていただきたいのは、日本国で、いいですか、親から虐待を受けたり捨てられた子供たちを国が完璧な意味で面倒を見てくれるのは、御存じですか、15歳まで、中学校卒業までです。その後については、各宗教団体の施設や我々が作った民間の施設に委託をして、国が2、県が1、逗子市の子なら逗子市が1を出し

てくれて、最低限のお金で面倒を見る。でも、どんな子でも18歳になって高等学校を卒業するか、あるいは高等学校を定時制であれ、やめた段階で捨てられる。15、16、17の子が自分で生きていきなさい。面倒見てくれない。そんなことができますか。ですから、私は今、京都の綾部に夢のような施設をつくりました。135名の今、小・中・高・大学生、ここは自立するまですべて面倒を見ます。これは3,700人の毎月1万ずつ出してくれる人たちの好意によって成り立っている施設です。こういうものを支えてほしいし、またぜひ逗子の中でね、なかなかつくるのは大変かと思えますけども、そういう施設がもっと必要になりますから、そういうものについての理解を持っていただきたいと思っています。

今ね、横浜、名古屋、東京、京都の4弁護士会の若手の人権派の弁護士会の方々が今、アパートを借り上げやってるんです。場所は言えないんですが、そこに施設を出され、18歳からどこにも行けない子たちを大学行かせたり自立するまで面倒見よう。ペアレント、ペアレントがついてというような形もやっています。今の日本の社会保障制度、福祉制度のいろんな盲点が子供に関して出てきてますから、その辺も勉強していただいて、本当にこの逗子が社会福祉協議会を中心にね、どういう子供たちに対してもセーフティーネットが張ってあって、今、国はもう見ようとしていませんから、本当にどんな子も笑顔で、言われた施設の子も含めてね、本当に勉強好きならば大学まで、本当に補助して支えてやれる。そういう逗子、このまちならできると思うんですね。市の中でお金がないにしても、こういう子がいて、ぜひこの子の奨学金をつくりませんかといったら、岡ちゃんであれ、僕であれ、協力はできるし、皆さん方でも協力ができる。そういう体制づくり、逗子では一人の子も涙を流さない。そういうまちづくりを市長、よろしくお願いします。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。さあ、もう予定の時間が過ぎてしまいました。しゃべり足りない人がいたら大変申しわけないので、じゃあ、どうぞ。

【市民】 きょうもありがとうございます。先生の本とか講演でいろいろ学ばせていただきました。振り返って自分の子育てを振り返って、本当に、いかに叱りが多かったかという、そういう反省に立って、じゃあ私たちはこれから子供たちに何ができるかということ、それと市とですね、私たち住民とで何ができるかということを考えていきたいと思うんです。私、その何かヒントが欲しかったんですね。確かに…質問1つあるんですけども、ちょっと待ってくださいね。笑顔とか優しい言葉とか、こういうのって、たくさん浴びた子ほど、それが表に出るんですよ。

本当に優しいんです。それ、最近見ていて、例えばベッキーさんとか、関根（勤）さんの娘さん、いらっしやいますよね。あの方のやっぱり笑顔とか言葉を聞いていると、そうやって育ってきたんだなというのがわかるんですよ。だから、とてもきつい子がいたとしたら、それはそういうふうで育った不幸せな子なんだなということ。じゃあ私たちは、そういう一人ひとりの家庭をどうすることもできないけども、周りでどういうことができるかなという。それを先生に何かヒントいただきたいなと思ったんですけど。

あともう一つだけいいですか。先生がこんなに優しいのは、ひょっとして、御両親がとても優しい、すてきな御両親だったんじゃないですか。それをお伺いしたかったんです。

【水谷】 まず、じゃあ後半の質問からですね、僕は父親のいない、母だけのいわゆる母子家庭、しかもその母も貧しくて、僕を育てられなくて、僕は3つから親戚たらい回しにされたり、母と一緒に住めたのは中学校ちょっと前からです。本当に貧しい生活をしてきました。足袋というのは運動会ではいたんですけれどもね、僕は足袋が買えなかった。いつも素足でしたね。お弁当も本当に持っていくときに、ジャガイモだけとかね、本当に貧しくて。だからあまりね、家庭環境というものじゃないと思いますね。だから、そんな中で本当に人が好きで、特に子供たちが好きで、そのまま生きてきた人間です。

あとは、逗子市で、ともかく何をこれからできるかというためには、まずは逗子市の社会福祉協議会を軸としたり、あるいは相談窓口を、24時間の相談窓口は無理です。うちらでなければできませんし、それをやらせたら職員つぶれますから、やっぱりいろんな相談窓口をつくりながら、市民の中で、あるいは子供たちの中でどういう問題を抱えている子が現に逗子の中にいるのか。例えば不登校の子が各小・中でどの程度出てきて、それが過去どういうふうにあたり減ったりしてきているか。あるいは暴力事犯を犯すような子がいて、その背景にどういうものがあるか。それをきちっととらえた上で、逗子市だけでは無理なんです。例えば児童相談所、保健所というのは県の管轄になってくる。当然、心の病なら保健所、虐待があれば児相の力を借りなければいけない。そういう機関とケース会議を開きながら、学校の先生と、それぞれの子供たちに今できることを、いろんな機関連携の中でやっぱりやっていただければと思います。

実は僕も絡んでいるんですが、これはぜひね、機会があったら市長もそうですが、皆さん、見に行ってください。福岡市に「えがお館」という建物があるんです。これはね、福岡ドームのすぐ近くにビルがあります。1階は小学生用のいわゆる適応指導教室といって、学校に通えない子

供たちがそこで大学生のお兄ちゃんやアルバイトのお兄ちゃんたちと遊んだり勉強する場所。2階が中学生の適応指導教室。3階に何がすごいかというと、県・市のあらゆるすべての相談施設が3階に全部あるんです。教育委員会の相談コーナー、それから福祉事務所、児童相談所、それから医師会、弁護士会、ハローワーク、県警の少年サポートセンター。ほんと、例えば逗子の子供や親が何かを悩んだら、児童相談所はどこどこ、横須賀ですか、保健所はどこ、教育委員会はどこというふうに回らなければいけない。県警のサポートセンターはいわゆる県警本部とか、それを1カ所に統合することの中で、本当にそこですべての機関がその子や親のために何ができかって、一挙に動き始めるんですね。これを宮崎市では、そういう施設をつくるお金はないけれども、週に1回、そういう人たちの逗子の近くの人たちを集めながら、ケースを学校やいろんなところから持ってきてもらって、各機関がどう動けるかというのをやる。これだけでも機関連携で大分変わってくると思います。

実は子供たちを取り巻く環境の中で、子供たちが救い得ない一番の原因は縦割りの行政なんです。保健は保健関係とか、非行関係は司法は警察とか。それを融合しながら一体化していくことによって、相当いろんなアプローチができることになっています。これはもうぜひ市長にやっていただきたらと思います。でも、まずは今の現状をちゃんと我々逗子の市民が認知することです。いわゆる、だって逗子市に不登校の子が、学校へ通えない子がどのくらいいるとか、引きこもりの方がどれだけいるとか、暴力事犯がどうあったかというのは、みんな知らないわけですから、そのあたりを、特に興味のない、関心のない人にまで知らす必要があることではないですけれどもね。やっぱりそういう問題意識を共有しながら、こういう会の中で具体的に市民の力を借りてやっていったらと思います。こんなところでよろしいですか。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。もう5時8分ということなので、この辺で終了させていただきたいと思えますけれども、本当にきょうは水谷先生に貴重な御講演をいただいて、会場の皆さんとも意見交換ができて、本当に有意義な時間になったと思います。

逗子では今年、小・中学校8校全校にですね、学校支援の地域本部というのをつくりました。それで地域の皆さんが子供たちの学び、育ちをどうやってサポートして、まさに笑顔のあふれるね、学校・地域をつくっていくかということを地域の力で取り組んでいくという試みが始まっています。ですから、ぜひ皆さんもいろんな場面で子供たちにかかわって、そして自分の持っているものを子供たちにぜひ与えていただきたいし、それは結果、自分自身に返ってきて、そしてい

い地域がいい子供たちをはぐくんで、本当に素晴らしい逗子のまちになるんだなということを私もすごく願っておりますし、その意味で実は先週、みずから授業で「自分の夢」というのを語ったんですね。そうしたら、感想文を送ってくれまして、子供たちの。ものすごく子供たちが真剣に私の話を聞いてくれて、自分たちもこの逗子のために頑張らなきゃということを返してくれました。そういう心のキャッチボールがね、地域全体でできれば、本当に素晴らしいまちになるなと思っております。どうぞ皆さんもきょうのこのトークをきっかけにね、それぞれの御家庭で、地域で、皆様の声かけ運動も含めて、これからの生活に生かしていただきたいなと思っております。どうもほんときょうは水谷先生、ありがとうございました。（拍手）

【水 谷】 ありがとうございます。

【平井市長】 もう一度盛大な拍手をどうぞ、よろしく申し上げます。（拍手）どうもありがとうございました。

【司会（杉山）】 それでは、これもちまして本日のまちづくりトークを終了させていただきます。皆様どうぞお気をつけてお帰りくださいますようお願いいたします。ありがとうございました。

以上